市川市国府台遺跡第192-2・3地点

― 国府台県営住宅建替事業埋蔵文化財発掘調査報告書 2 ―

令和6年2月

千葉県教育委員会

市川市国府台遺跡第192-2・3地点

— 国府台県営住宅建替事業埋蔵文化財発掘調査報告書 2 —

序　文

いにしえより温暖な気候に恵まれた千葉県には、先人たちの生活の痕跡などが埋蔵文化財包蔵地（遺跡）として数多く残されています。これらの埋蔵文化財は県民共有の財産として、地域の歴史や文化の解明に欠かすことのできない貴重なものです。

千葉県教育委員会では、埋蔵文化財の保護と各種開発事業との調整、埋蔵文化財の調査研究・文化財保護思想の普及などを目的とした諸活動に加え、千葉県が行う開発事業に係る埋蔵文化財の記録保存のための発掘調査や調査成果の整理、報告書の刊行について実施しております。

本書は、千葉県教育委員会埋蔵文化財調査報告第52集として、国府台県営住宅建替事業に伴って実施した市川市国府台遺跡第192地点の２冊目の発掘調査報告書です。調査成果としては、弥生時代や古墳時代の竪穴建物跡を検出するとともに、奈良・平安時代の版築による基壇のほか、掘立柱建物跡群、大溝などを検出しました。

国府台遺跡は、古くから下総国府の推定地とされており、今回検出された遺構群は、この国府に関連した諸施設の可能性があり、その様相を知る上で貴重な成果を得ることができました。

刊行に当たり、本書が学術資料としてだけでなく、郷土の歴史に対する興味を深めるための資料として多くの方々に広く活用されることを期待しております。

最後に、発掘調査から整理作業を通じ、地元の方々をはじめとする関係者の皆様や関係諸機関には多大な御協力をいただきました。心から感謝申し上げます。

令和６年２月

千葉県教育庁教育振興部

文化財課長　　稲村　弥

凡　例

1　本書は、千葉県県土整備部住宅課による国府台県営住宅建替事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書の第２冊目である。

2　本書は、下記の遺跡を収録したものである。

国府台遺跡第192-2地点及び第192-3地点　市川市国府台一丁目２－５ほか

（遺跡コード203-003(192)）

なお、既に報告書発行済みとなっている第192地点の一部については、第192-1地点として取り扱うことにする。

3　発掘調査から報告書作成に至る整理作業は、千葉県県土整備部住宅課の依頼を受け、千葉県教育庁教育振興部文化財課が実施した。

4　調査組織及び発掘調査と整理作業の期間・担当者等は、第１章第１節に記載したとおりである。

5　本書の執筆は、文化財主事　勝田雄大、編集は、主任上席文化財主事　蜂屋孝之が行った。

6　発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県県土整備部住宅課、市川市教育委員会、市立市川考古博物館、公益財団法人千葉県教育振興財団、大橋泰夫、垣中健志、近藤良介、手嶋秀吾、見留武士、杉山元明、小野英夫、加藤貴之、松本太郎、山路直充、高木彬夫、金出ミチル、ほか多くの方々から御指導、御協力を得た。

7　本書で使用した地図の座標値は、世界測地系に基づく平面直角座標で、図面の方位はすべて座標北である。

8　本書で使用した地形図は下記のとおりである。

第１・５・８・９・50図　市川市発行 1/2,500 市川市地形図を編集

第３図　国土地理院ウェブサイトにおける地理院タイル（標高タイル）から陰影起伏図を作成し、編集

第４図　国土地理院発行 1/25,000 地形図「松戸」「船橋」を編集

9　図版１の航空写真は、京葉測量株式会社による昭和42年撮影のものを使用した。

10　遺構種別の記号は以下のとおりである。

SI：竪穴建物跡　SB：掘立柱建物跡　SD：溝状遺構　SK：陥穴・土坑

SA：柱穴列　SX：版築遺構ほか

11　出土した遺物のうち、土師器については下記のトーンを使用した。また、それ以外の用例は各挿図に示した。

赤　彩　　黒色処理　　焼　土

12　遺物実測図の縮尺は、以下の通りである。

土器実測図　１/３　拓本図　１/３　瓦　１/４　鉄製品　１/２　石器・その他　１/３

本文目次

第１章　はじめに …… 1
　第１節　調査の概要 …… 1
　　1　調査の経緯と経過 …… 1
　　2　調査の方法 …… 3
　第２節　遺跡の位置と環境 …… 4
　　1　地理的環境 …… 4
　　2　周辺遺跡 …… 7
　　3　近世～現代の国府台と軍施設 …… 9
　第３節　基本層序と調査の成果 …… 11
　　1　基本層序 …… 11
　　2　調査の成果 …… 12
第２章　縄文時代の遺構と遺物 …… 16
　第１節　概要 …… 16
　第２節　遺構と遺物 …… 16
　第３節　遺構外出土遺物 …… 17
第３章　弥生時代の遺構と遺物 …… 18
　第１節　概要 …… 18
　第２節　竪穴建物跡 …… 18
　第３節　遺構外出土遺物 …… 25
　　1　概要 …… 25
　　2　出土遺物 …… 25
第４章　古墳時代の遺構と遺物と遺物 …… 26
　第１節　概要 …… 26
　第２節　竪穴建物跡 …… 26
第５章　奈良・平安時代の遺構と遺物 …… 39
　第１節　概要 …… 39
　第２節　竪穴建物跡 …… 39
　第３節　掘立柱建物跡 …… 41
　第４節　版築遺構 …… 48
　第５節　溝状遺構 …… 50
　第６節　その他の遺構 …… 59
　第７節　遺構外出土遺物 …… 61
　　1　概要 …… 61
　　2　出土遺物 …… 61
第６章　総括 …… 62

第１節　７世紀以降の遺構群とその変遷 ……62
第２節　千葉県内の布掘り掘立柱建物跡 ……63
第３節　版築遺構の類例と掘込地業 ……65
写真図版
報告書抄録

挿図目次

第１図　遺跡の位置と周辺の地形図 …… 2
第２図　グリッド配置図・下層確認グリッド位置図 …… 3
第３図　国府台遺跡周辺の地理的環境 …… 5
第４図　国府台遺跡第 192 地点と周辺の遺跡 … 6
第５図　検出された軍施設……10
第６図　レンガ刻印……11
第７図　基本層序……12
第８図　第192-1・2地点遺構配置図 ……14
第９図　第192-3地点遺構配置図 ……15
第10図　（3）SK002・（3）SK003・（3）SK004 ……16
第11図　縄文時代遺構外出土遺物……17
第12図　（2）SI006……18
第13図　（3）SI001……20
第14図　（3）SI002……21
第15図　（3）SI012……22
第16図　（3）SI013……23
第17図　（3）SI015……24
第18図　弥生時代遺構外出土遺物……25
第19図　（2）SI001・（2）SI004……27
第20図　（2）SI005……28
第21図　（3）SI007（1）……30
第22図　（3）SI007（2）……31
第23図　（3）SI007（3）……32
第24図　（3）SI009（1）……34
第25図　（3）SI009（2）……35
第26図　（3）SI011……36
第27図　（3）SI014……37
第28図　（3）SI016……38
第29図　（2）SI003……40
第30図　（2）SB002……41
第31図　（3）SB004及び（3）SK008・（3）SK009 ……42
第32図　（3）SB001 ……43
第33図　（3）SB002 ……44
第34図　（3）SB003 ……45
第35図　（3）SB005 ……46
第36図　（3）SA001 ……47
第37図　（3）SX001 ……49
第38図　（2）SD001 ……50
第39図　（3）SD001・（3）SD002……51
第40図　（3）SD004・（3）SX002……52
第41図　（3）SD004出土遺物 ……53
第42図　（3）SD005・（3）SD006……54
第43図　（3）SD007（1）……55
第44図　（3）SD007（2）……56
第45図　（3）SD007（3）……57
第46図　（3）SD007（4）……58
第47図　（3）SX006 ……59
第48図　（2）SK001・（2）SK002……60
第49図　古墳、奈良・平安時代遺構外出土遺物 ‥61
第50図　国府台遺跡第192地点とその周辺……63
第51図　布掘り掘立柱建物跡と千葉県内の事例‥64

表目次

第１表　周辺遺跡一覧表……7
第２表　遺構一覧表……13

図版目次

図版１　国府台遺跡周辺航空写真
図版２　第192-3地点
図版３　遺構（２）SI001・（２）SI003・（２）SI004・（２）SI005・（２）SI006
図版４　遺構（３）SI001・（３）SI002・（３）SI007・（３）SI009・（３）SI011
図版５　遺構（３）SI012・（３）SI013・（３）SI014・（３）SI015・（３）SI016・（３）SB001
図版６　遺構（３）SB001・（３）SB002・（３）SB003
図版７　遺構（３）SB004・（３）SK008・（３）SK009
図版８　遺構（３）SB004・（３）SB005
図版９　遺構（３）SA001・（３）SX002・（３）SX001
図版10　遺構（３）SX001
図版11　遺構（３）SX001・版築剥ぎ取り作業
図版12　遺構（３）SD001・（３）SD002・（３）SD004・（３）SD005・（３）SD007
図版13　遺構（３）SD007・（２）SB002・（２）SI003・（３）SX006・（３）SK002・（３）SK003・（３）SK004
図版14　遺物（２）SI001・（２）SI003・（２）SI005・（３）SI007
図版15　遺物（３）SI007・（３）SI009・（３）SI011・（３）SI014・（３）SI016・（３）SD004
図版16　遺物（３）SD007・（３）SX006・（２）SK002・遺構外
図版17　（３）SD007瓦塼類
図版18　縄文土器・弥生土器・土製品・石製品

第１章　はじめに

第１節　調査の概要

１　調査の経緯と経過

千葉県県土整備部住宅課では、老朽化した公営住宅の効率的かつ円滑な更新を行うため、県営住宅の建替・建設事業計画を策定した。この計画に基づき、建設から約60年が経過し、建物の老朽化が進んでいた市川市国府台県営住宅の建替事業が計画された。事業地は周知の埋蔵文化財包蔵地である国府台遺跡内に位置していたため、遺跡の取扱いについて平成26年に千葉県教育委員会と住宅課で協議を行った結果、事業の性格上、やむを得ず記録保存の措置を講ずることとなった。

調査地点は、市川市教育委員会による国府台遺跡の一連の調査番号を付して第192地点とし、発掘調査を実施した。県営住宅建替工事は、居住者の住み替えを伴うため全建物施設を一度に解体・撤去できないことから、大きく第１地区～第３地区の３地区に分けて、解体・撤去・発掘調査の順に工程が組まれた。第１地区（旧１号・２号・５号棟部分、以下第192-1地点と表記）は、平成28・29年度に調査を実施し、平成30年度に報告書を刊行している。今回の報告は、残る第２地区（旧６号棟部分、以下第192-2地点と表記）と第３地区（旧３号・４号・７号棟部分、以下第192-3地点と表記）の発掘調査報告書にあたる。

なお、第192-1地点の調査で検出した遺構のうち、奈良・平安時代と推定された道路跡については、下総国庁推定地の南側に延びていたと考えられる道路にあたり、古代の下総国府の実態を解明する上で貴重な遺構であることから、県営住宅建替事業の建物工事による影響が及ばない305㎡の範囲については、現状保存の措置を講じることとした。

第192-2地点・第192-3地点の発掘調査及び整理作業に関わる各年度の調査組織及び担当者・期間・内容は以下のとおりである。

○令和２年度 第192-2地点　発掘調査

教育振興部文化財課長 田中文昭　副課長 髙梨俊夫　発掘調査班長 大内千年

担当者　文化財主事 渡邊　玲

期　間　令和２年11月16日～令和３年１月15日

令和３年２月15日～令和３年２月26日

内　容　調査対象面積 1,384㎡

確認調査 上層1,384㎡　下層44㎡　本調査　上層290㎡　下層０㎡

○令和３年度 第192-3地点　発掘調査

教育振興部文化財課長 田中文昭　副課長 髙梨俊夫　発掘調査班長 吉野健一

担当者　上席文化財主事 田井知二

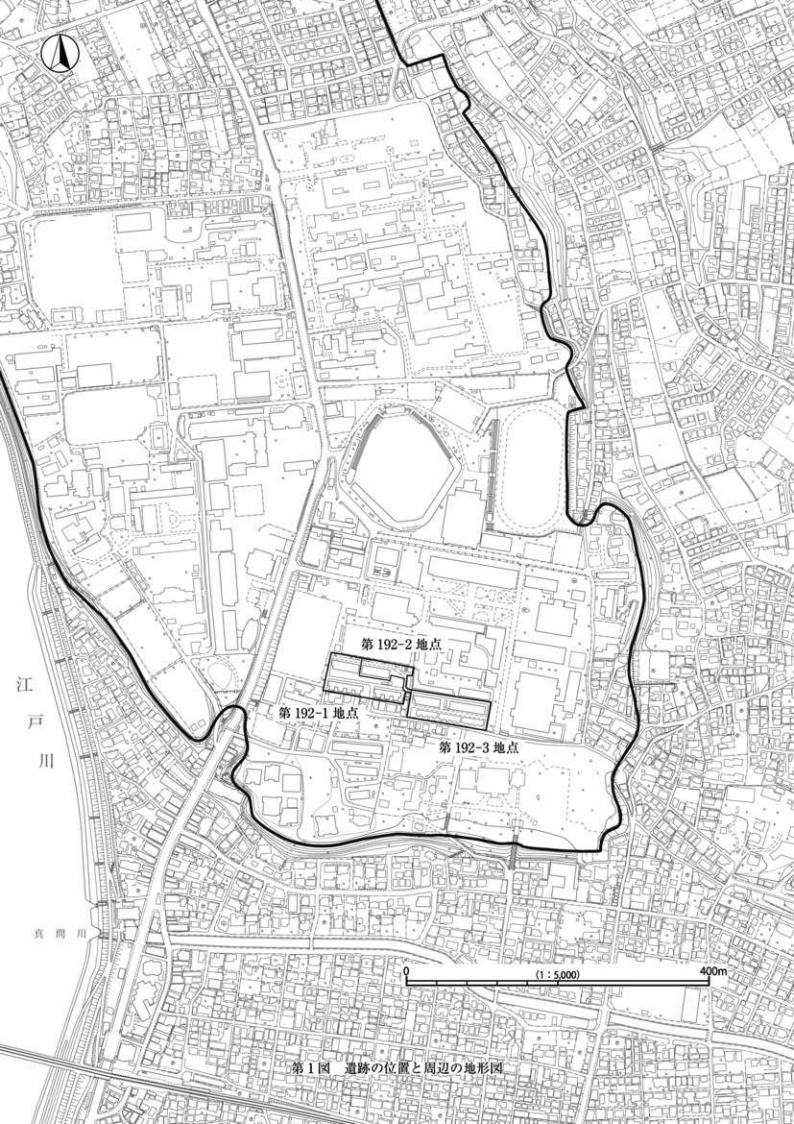
期　間　令和３年12月６日～令和４年２月28日

内　容　調査対象面積 3,794㎡

確認調査 上層615㎡

○令和４年度 第192-3地点　発掘調査

教育振興部文化財課長 金井一喜　副課長 四柳　隆　発掘調査班長 黒沢　崇



第 1 図　遺跡の位置と周辺の地形図

担当者　上席文化財主事 田井知二　文化財主事 勝田雄大　久我谷渓太

期　間　令和４年４月７日～令和４年５月13日

令和４年８月１日～令和５年１月19日

内　容　調査対象面積3,794㎡

確認調査　上層191㎡　下層44㎡　本調査　上層3,794㎡　下層０㎡

○令和５年度　第192-2地点・第192-3地点　整理作業

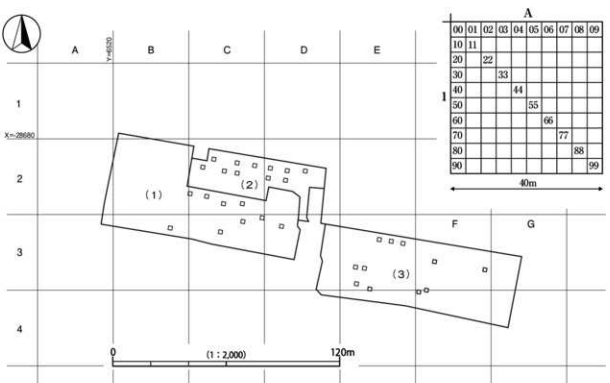
教育振興部文化財課長 稲村　弥　副課長 四柳　隆　発掘調査班長 黒沢　崇

担当者 文化財主事 勝田雄大　森　裕樹　主任上席文化財主事　蜂屋孝之

2　調査の方法（第２図）

発掘調査に当たっては、調査区全体を覆うように公共座標に基づくグリッド設定を行った。X＝-28680、Y＝6520を基点とし、40m× 40mの方眼網を設定して大グリッドとした。名称は北から南へ１・２・３・・・、西から東へA・B・C･･･とした。大グリッドは更に４m×４mの小グリッドに100分割し、北西隅を00、南東隅を99とした。大グリッドと小グリッドを組み合わせて2B-67のように呼称した。縄文時代以降の上層確認調査は、旧県営住宅等の解体・基礎撤去工事の進捗に合わせて実施し、遺構が検出された範囲の本調査を行った。旧石器時代の下層確認調査は、上層の本調査終了後に実施したが、明治以降の陸軍関係施設の建設や旧県営住宅建設に伴う造成により立川ローム層の遺存が悪いことから、遺存している地区に限って実施した。その結果、遺物の出土がなかったことから確認調査で終了している。

発掘調査に伴う記録作成は、デジタル写真測量及び平板測量により平面図・遺構断面図等を作成した。



第２図　グリッド配置図・下層確認グリッド位置図

写真撮影はデジタルカメラ（RAW・JPEGデータ）により行った。調査終了後、調査区内を重機で埋め戻して現場作業を終えた。検出した遺構は、凡例で記したように竪穴建物跡はSI、溝状遺構はSDなどの記号を付し、種類記号ごとに３桁の通し番号と合わせてSI001のような遺構番号として表記した。遺物は遺構ごとに通し番号を付け取り上げた。遺構に伴わない遺物については、小グリッド単位で一括して取り上げた。

なお、調査中に確認された旧陸軍関係施設等については、市川市教育委員会との協議により、近代遺構の下の遺構・遺物との関係から発掘調査に支障のない範囲で図面作成や写真撮影を行うこととした。それに伴う資料については、市教育委員会立会いのもと、現地で選別しその一部を採取した。また、今回の調査地区内からは、千葉県内の検出例が極めて少ない版築遺構が発見されたことから、版築の土層断面の転写（剥ぎ取り）を実施した。

整理作業については、遺物の水洗・注記を行った後、分類して接合と実測を行った。並行して調査図面・写真の記録整理を進め、現場図面の修正を行い、トレース原図を作成した。その後、遺構・遺物の図面をトレースして挿図を作成し、写真図版も併せて作成した。原稿執筆・レイアウト・編集作業を経て、報告書の刊行に至った。なお、編集作業と併せて遺物や記録類などの資料の収納整理作業を実施した。

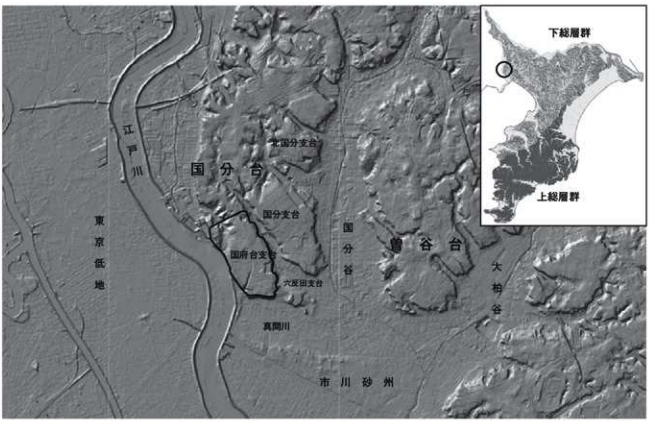
今回の調査地点は第192地点として、平成18年～令和５年までに３度にわたる発掘調査が実施されてきた。遺構番号については、地点ごとで付していることから、本報告書では、基本的に調査時の番号を踏襲するものの、遺構の種別記号を付した上でその前に（　）で調査次数の番号を付けて、本報告書における遺構番号とした。この報告書では（2）または（3）の調査次数が付されることになる。すでに報告書が刊行されている第192-1地点の調査の遺構には（1）が付されていないことをあらかじめお断りしておく。

なお、本報告書では、すでに刊行されている（1）の報告書同様に「国府」を、律令制下の諸国に設置された国庁などの様々な役所や施設を含む語とし、国庁をはじめ、国司館や軍団関係施設・学校・市・国府の諸施設で使役される徭丁や工人の宿舎などの施設が所在する範囲を「国府域」と称する。「国庁」は国府の中枢施設である政庁を表し、「国衙」は国庁及びその周辺に設けられた国の事務や維持・管理・運営に携わる曹司群を指す語とする。

第２節　遺跡の位置と環境

１　地理的環境（第３図）

国府台遺跡が所在する市川市は、千葉県の北西端に位置し、江戸川の下流左岸にあって北側で松戸市、東側で鎌ケ谷市、船橋市、南側で浦安市と東京湾に接し、江戸川を挟んで西側は、東京都江戸川区などと接している。市域の北部は下総台地の一部を構成して緩やかな高低差の台地、南部は海抜２ｍ前後の平野部からなっており、ほぼ全域が住宅街や農地などの土地利用となっている。下総台地とは、千葉県北部一帯にかかる台地を指し、現在は江戸川開削によって切り離されているが一部は埼玉県東部に及んでいる。旧下総国の台地であり北総台地とも呼ばれている。千葉県北東部の成田市や香取市を中心とする台地、千葉県北西部の野田市など江戸川沿いから船橋市にかけての台地、埼玉県東端の幸手市、北葛飾郡杉戸町及び春日部市など江戸川沿いの台地（埼玉県では宝珠花台地、金杉台地などと呼ばれている）に大別され、香取市や香取郡東庄町などの利根川沿いでは50メートルを超える所もあるものの、市川市内の台地標高は概ね20ｍ～25ｍであり、なだらかな起伏の続く台地が広がっている。市内を南北に貫く国分谷と北東にのびる

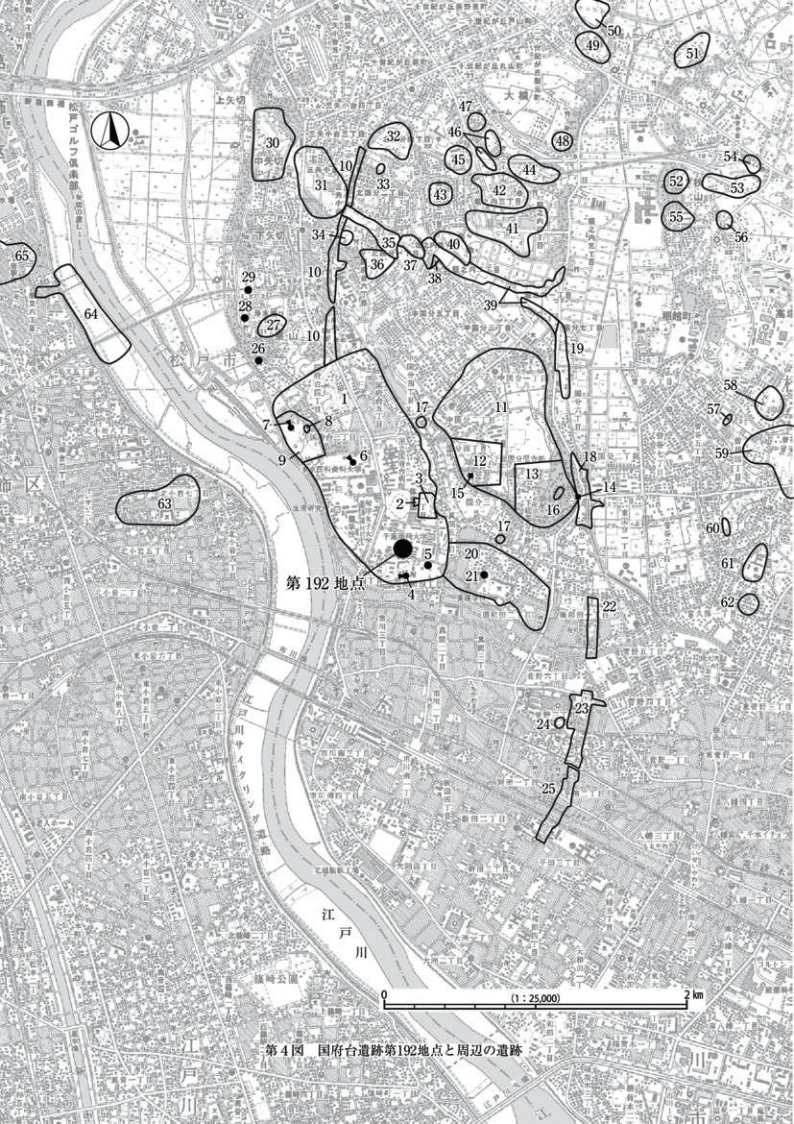


第３図　国府台遺跡周辺の地理的環境

大柏谷からなる谷底平野の低地では、標高10m以下の場所が多く、縄文海進から古墳時代にかけての時期に発達した市川砂州では標高３ｍ～６ｍを示している。

国府台遺跡が所在する台地は、東西を江戸川と国分谷に挟まれた北西方向に長い台地からなり、広くは国分台と呼ばれ、西を江戸川、南を真間川、東を国分川によって区切られており、支谷によってさらにこの台地を分けることができる。台地奥部まで細長く入り込む六反田支谷によって、東側が国分支台、西側が国府台支台に分けられ、国分支台の南端部には下総国分寺・国分尼寺が立地し、国府台支台には国府台遺跡が立地する。本報告書では国府台支台のことを指す場合、便宜的に国府台と呼称する。国府台の南東端から通称須和田台と呼ばれる段丘が南東にのびており、現在は土取りにより段丘の東側だけが小山のように残っている。

国府台遺跡が所在する国府台は、標高約20m～25mの起伏がほとんどない平坦な広い台地である。この台地の基底部は、洪積世の下総層群上部層の成田層からなり、木下層を上部層とし、その上に常総層及び常総粘土層が堆積する。最上部は新期関東ローム層が堆積し、武蔵野ローム及び立川ロームが台地全域をほぼ覆っている。台地の西側は東京低地との境をなし、急峻な斜面となっており、南側もまた同様で、これは縄文海進による海食崖である。一方、行徳低地と呼ばれる南部の低地は、縄文海進期に形成された奥東京湾の湾口部にあたり、海進以前はこの部分には台地が大きく張り出していたが、海進が進んだ縄文時代早期以降の海食作用によって台地が急速に浸食され、縄文海進の最盛期には奥東京湾の湾口部を形成した。台地の浸食は海退期にも続き、台地から供給された下総層群由来の砂は沿岸流によって運ばれて、縄文時代中期後半以降、国分川と大柏川の河口を閉塞するように市川砂州と呼ばれる砂州を発達させていっ



第４図　国府台遺跡第192地点と周辺の遺跡

第1表　周辺遺跡一覧表

遺跡番号	遺跡名	時期	遺跡番号	遺跡名	時期
1	国府台遺跡	縄文・弥生・古墳・奈良・平安・中世	35	稲荷作遺跡	旧石器・縄文・古墳・奈良・平安・中世
2	下総総社跡	古墳・奈良・平安	36	鉄砲塚	縄文・奈良・平安
3	市営総合運動場内遺跡	奈良・平安	37	小塚山遺跡	旧石器・縄文・弥生・古墳・奈良・平安・中世
4	弘法寺古墳	古墳			
5	真間山古墳	古墳	38	国分下台遺跡	縄文・古墳
6	法皇塚古墳	古墳	39	道免き谷津遺跡	旧石器・縄文・弥生・古墳・奈良・平安・近世
7	明戸古墳	古墳			
8	里見公園内遺跡	奈良・平安	40	堀之内貝塚	旧石器・縄文・中世
9	国府台城跡	中世	41	権現原遺跡	旧石器・縄文・奈良・平安
10	新山遺跡	旧石器・奈良・平安	42	八反割A遺跡	縄文・奈良・平安
11	下総国分遺跡	縄文・奈良・平安	43	八反割B遺跡	縄文・奈良・平安
12	下総国分尼寺跡	奈良・平安	44	彦八山遺跡	旧石器・縄文・弥生・古墳・中世・近世
13	下総国分寺跡	奈良・平安			
14	下総国分寺東瓦窯跡	奈良・平安	45	東山作遺跡	縄文・奈良・平安
15	(伝)下総国分寺西瓦窯跡	奈良・平安	46	大橋向山遺跡	縄文・奈良・平安
16	国分平川遺跡	縄文・奈良・平安	47	丸山遺跡	古墳
17	不入斗遺跡	奈良・平安・中世	48	南台遺跡	縄文・古墳
18	北下遺跡	縄文・古墳・奈良・平安・中世	49	白幡遺跡	旧石器・縄文・弥生
19	富下遺跡	縄文・古墳	50	渋詰原遺跡	旧石器・縄文・弥生・古墳・平安
20	須和田遺跡	弥生・古墳・奈良・平安	51	新田前遺跡	縄文・古墳
21	太鼓塚古墳	古墳	52	秋山上宿遺跡	縄文・古墳
22	後通遺跡	縄文・古墳・奈良・平安・中世	53	牧之内遺跡	旧石器・縄文・古墳
23	曽野遺跡	古墳・奈良・平安・中世	54	前原口遺跡	縄文・弥生
24	日出学園遺跡	弥生	55	稲堀込遺跡	古墳
25	平田遺跡	縄文・弥生・古墳・奈良・平安・中世	56	堀込遺跡	縄文・古墳
			57	東山王東遺跡	縄文・奈良・平安
26	丸山遺跡	旧石器・古墳	58	池ノ台遺跡	縄文・古墳
27	天神山遺跡	平安	59	曽谷貝塚	縄文
28	栗山古墳群	古墳	60	曽谷城跡	中世
29	立出し遺跡	縄文・弥生・古墳	61	三中校庭内遺跡	縄文・古墳
30	上矢切南台遺跡	旧石器・縄文・奈良・平安	62	宮久保B遺跡	弥生
31	下矢切東台遺跡	旧石器・縄文・奈良・平安	63	上小岩遺跡	弥生・古墳・奈良・平安・中世
32	作兵衛台遺跡	縄文・奈良・平安	64	柴又河川敷遺跡	縄文・弥生・古墳・奈良・平安・中世・近世
33	横塚遺跡	奈良・平安			
34	愛宕遺跡	奈良・平安	65	柴又帝釈天遺跡	奈良・平安・中世・近世

た。埋積が進んだ湾口部は、東京湾最奥部の河口干潟となり、やがて河口低地となっていった。現在の国分川本流の流路は、松戸市域の台地から西へ下り、松戸市和名ヶ谷南部で東西から南北へ向きを変えて、市川市北国分町から市川市国分町へと南へ下り、市川市菅野付近で現在は西から東へ流れる真間川と合流して東京湾に流れ込んでいる。市川砂州の形成に伴って台地との間に入り江が残され、奈良時代には『万葉集』にも詠われた「真間の入江」の景観が広がっていたと考えられている。

2　周辺遺跡（第4図）

国府台遺跡周辺の主な遺跡と、国府台遺跡の調査成果を時代ごとに概観する。第4図には、国府台遺跡周辺にある弥生時代以降の遺構・遺物が確認されている遺跡を中心に位置を示し、旧石器時代、縄文時代の遺跡については、代表的な遺跡を示した。

旧石器時代　丸山遺跡(26)、新山遺跡(10)があげられる。江戸川を望む河岸段丘上にある丸山遺跡からはナイフ形石器・石核などが出土している。六反田支谷の最奥部に位置する新山遺跡からは、ナイフ形石器、削器などがⅦ層下部～Ⅸa層にかけて出土している。

縄文時代　国分谷の両岸の台地である国分台と曽谷台には、縄文時代の著名な遺跡が濃く点在している。早期の痕跡としては、国府台遺跡第176地点(1)、須和田遺跡第83地点(20)などで早期後葉の条痕文系土器が出土している。市川市内では早期後葉から貝塚の形成が確認され、大柏谷の美濃輪台遺跡と杉ノ木台遺

跡、国分谷では向台貝塚などがある。いずれも低滅水性のハイガイとマガキを主体とする貝塚で、小規模な貝ブロックを伴うのが一般的である。規模の大きな貝塚が発見された低地遺跡の雷下遺跡（19）は、縄文海進期に海辺で暮らした人々の遺跡で、最古級の丸木舟が出土している。前期以降になると遺跡数は次第に増加し、低地遺跡の道免き谷津遺跡（39）では黒浜式・諸磯式・浮島式がまとまって出土し、漆による精巧な赤彩土器も見られる。中期から後期にかけては、貝塚を伴う拠点的な大規模集落が点在する。国分台では、国史跡の堀之内貝塚（40）をはじめとして、権現原遺跡（41）、イザナギ神社境内遺跡、八反割Ａ・Ｂ遺跡（42）・（43）、東山作遺跡（45）などがあるほか、国分谷を隔てた対岸の曽谷台でも、平作遺跡（向台貝塚）・曽谷貝塚（59）など同様な遺跡が点在している。

弥生時代　中期の標式土器となっている須和田式土器が命名された県史跡須和田遺跡（20）が段丘上に位置している。国府台遺跡第29地点（１）からも須和田式土器が少量出土している。中期後葉と後期前葉に国府台遺跡と須和田遺跡（20）で環濠集落が展開しており、市川砂州で仕切られた低地帯で稲作が開始された可能性を示している。さらに、国分台の北西に位置する松戸市上矢切南台遺跡（30）では弥生時代後期末から古墳時代初頭の竪穴建物跡を検出し、六反田支谷の最奥部に面する市川市小塚山遺跡（37）でも同時期の竪穴建物跡を検出した。国分台の北東部にある松戸市彦八山遺跡（44）では後期前葉から中葉及び後期末の竪穴建物跡と土器が検出されている。さらに北では松戸市諏訪原遺跡（50）が弥生末から古墳時代前期の集落遺跡として知られる。また、国分谷を挟んだ対岸にある曽谷台南端に位置する宮久保Ｂ遺跡（62）でも後期末から古墳時代前期の遺物が見つかっている。一方、低地の市川砂州上では日出学園遺跡（24）や平田遺跡（25）で弥生時代後期の遺物が出土していることから、弥生時代後期以降、低地にも活動領域が広がっていったと考えられる。

古墳時代　国府台から真間にかけて国府台古墳群が存在し、北の松戸市栗山古墳群（28）まで広がっている。市川市内最大の古墳は６世紀中葉に築かれた前方後円墳の法皇塚古墳（６）で、武具や馬具など豪華な副葬品が見つかっている。国府台遺跡第29地点（１）では複数の円墳の周溝と見られる遺構と埴輪片が出土しており、６世紀後半～７世紀初頭にかけての群集墳であったと考えられている。また、群集墳を営んだ人々の竪穴建物群が国府台遺跡や須和田遺跡（20）で濃密に検出されている。

奈良・平安時代　国府台の東側にある国分支台には国史跡下総国分寺・国分尼寺が立地する。台地の東側の斜面には下総国分寺東瓦窯跡（14）や国史跡北下遺跡（18）といった、国分寺・国分尼寺の瓦を焼いた瓦窯跡や梵鐘鋳造遺構が確認されている。国分川に面した低地の遺跡でもある北下遺跡（18）からは、墨書土器や人名が刻書された白木弓などが出土し、国府域の東の境界における水辺祭祀の場であったと考えられている。「館」の墨書土器が出土し、国府に関係する水場機能を備えていた後通遺跡（22）や、平安時代の竪穴建物跡が検出され、駅路との関わりが想定される平田遺跡（25）も含め、近年の調査で国府関連遺跡が国分川周辺の低地や市川砂州まで展開していたことが明らかになっている。さらに、江戸川対岸の東京低地でも微高地上に位置する江戸川区上小岩遺跡(63)や葛飾区柴又河川敷遺跡(64)、柴又帝釈天遺跡(65)から奈良・平安時代の遺構・遺物が検出されていることから、「下総国葛飾郡大嶋郷戸籍」にある嶋俣里・甲和里・仲村里といった集落が展開していたと考えられる。

中世　国府台遺跡内の里見公園から北側の台地全域に国府台城跡（９）が築かれる。里見氏と後北条氏が争った国府台合戦の戦場としても著名であり、土塁や空堀などが遺存している。天正18（1590）年の徳川家康の江戸入部によって、国府台城は廃城となっている。

3　近世～現代の国府台と軍施設（第５・６図）

近世～現代　江戸時代に入ると市川市内のほとんどは、海沿いの製塩を管理する上で重要であったことから幕府直轄領となった。寛文３(1663)年に曹洞宗総寧寺が関宿から移転し、国府台はその寺領となっている。六所神社などの寺社地以外は、小規模な集落と畑地が広がっており、江戸期の生産の中心は、行徳の塩生産と低地の稲作がその中心となっていた。

明治時代に入ると、高等教育機関の建設が明治政府によって計画されたが、西南戦争による資金不足などもあって立ち消えとなり、それに代わって陸軍省による陸軍教導団が設置され、終戦まで国府台は軍隊の町として発展していく。明治32(1899)年に教導団が廃止され野戦砲兵第二旅団に、大正11(1922)年には同旅団に代わって野戦重砲兵第二旅団、後に第三旅団へと編成替えされ、軍用地としての土地改変が大規模に進められることになる。下総国分寺が所在する国分台の北部には東練兵場や陸軍射撃場、国府台には西練兵場のほか、騎砲兵大隊、高射砲連隊、独立工兵連隊などが置かれ、多くの施設が建設された。また、明治19(1886)年には陸軍教導団病院が設置され、後に国府台陸軍病院、戦後は国立国府台病院へと移り変わる。戦後は東京近郊の住宅地として急速に宅地化が進み、陸軍の跡地は現在、東京医科歯科大学や千葉商科大学、和洋女子大学などのほか小・中学校及び高等学校などが集中する学園都市となっている。

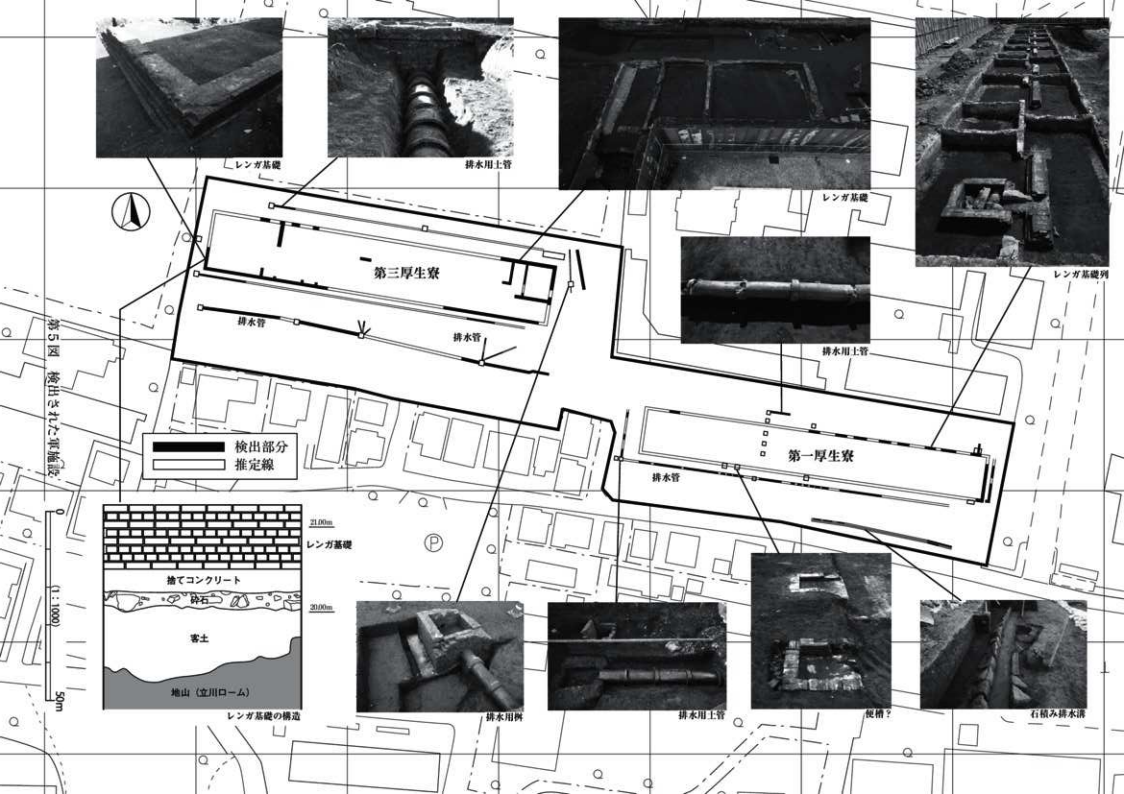
今回の調査地点は、第二次世界大戦後、戦災者や引揚者の応急的な住宅供給のために転用されていた陸軍施設が位置していた場所で、昭和30年代にその施設群を取り壊して、鉄筋コンクリート４階建及びコンクリートブロック造テラスハウスなどの県営住宅が建設された。その県営住宅の改築にあたり、旧住宅の地下構造物の完全な撤去が行われる前に確認調査を実施した結果、県営住宅のコンクリート基礎のみならず、明治期以降の陸軍の諸施設のコンクリートやレンガの建物基礎などが確認された。また、軍関係の装備品の一部や明治期以降の生活ごみなどが明治期以降繰り返された造成による撹乱層から出土している。

軍施設　旧県営住宅建設により取り壊された軍施設は、「野戦砲兵旅団司令部其他三ケ連隊営配置図」（注１）から野戦重砲兵第十七連隊の第一・第三厚生寮の建物であったことが窺える。旧県営住宅の基礎工事は、厚生寮の基礎を完全に撤去することなく必要な部分のみを撤去してコンクリート基礎が設置されていることが判明し、損壊が激しいものの建物規模などについては第５図のように復元することができた。第三厚生寮の南西コーナーで確認した基礎構造は、地山（立川ローム）の下層までかなりの掘削が行われており、客土を入れ直して地均しを行い、その上に砕石を敷き、厚めに捨てコンクリートを流し込んでいる。レンガの基礎はその捨てコンクリートの上に設置されており、現在でも一般的に行われている基礎構造である。レンガの積み方は、イギリス式と考えられる。

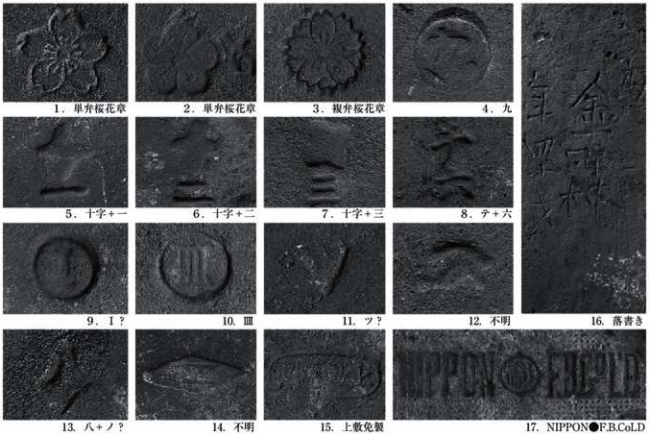
検出された基礎から、対向する建物コーナー２か所が確認できた第三厚生寮の規模については、桁行92m×梁間16m、第一厚生寮は、桁行が不明だが下水施設などの位置から概ね第三厚生寮と同規模の92mと推定され、梁間は12mであることから第三厚生寮よりやや奥行きの小さな建物であったと考えられる。

また、第一厚生寮の東側梁間よりさらに東側でレンガの基礎が見つかっており、第一厚生寮よりも古い建物の存在が推測される。このほか排水施設及び排水用土管が建物基礎の周囲で検出されている。

また、馬関連のバックルや革紐などの装備品も周辺から出土しており、「野戦砲兵第十七連隊兵営之図」（注２）には厩舎があったことが確認できることから、第一・第三厚生寮に隣接して存在した厩舎で使用された道具類であると考えられる。このほか、明治期に建設された多くの軍施設でレンガが使用されていたことから、建築用普通レンガ(赤レンガ)が多量に出土している。また、平の寸法がやや小さいレンガのほか、



第5図　検出された軍施設



第６図　レンガ刻印

数点だが耐火用特殊レンガ（白レンガ）も出土している。普通レンガは、長手222㎜～ 234㎜、小口107㎜～113㎜×58㎜～ 63㎜で、現在のJIS規格（210㎜×100㎜×60㎜）よりもやや大きいサイズで、赤色またはにぶい赤褐色を呈している。微量だが普通レンガには刻印のあるものが含まれていた。第６図に示したように、単弁桜花章、複弁桜花章などのほか枠内に「上敷免製」の文字なども読み取れる。このほか焼成前に「□（上敷カ）金町村年四十才」と書かれた落書きと思われる刻書レンガが出土している。また、耐火レンガには平の片面に格子目が施され、さらに会社のロゴマークの両側に「NIPPON」「F.B.CoLD」の文字が刻印されている。「上敷免製」の刻印から渋沢栄一の日本煉瓦製造会社によるレンガであることが確認でき、先の金町村云々の刻書から金町煉瓦製造所製の可能性や働きに出た金町村の住民の存在を窺い知ることができる。数種の刻印や耐火レンガなどから、国府台における軍施設の建設に伴い、明治20年以降に生産が開始された近隣の煉瓦製造所から出荷された製品などが使われていることがわかる。なお、これら軍施設関係資料は、市川市教育委員会との協議により報告書刊行後、市立市川歴史博物館で保管することとしている。

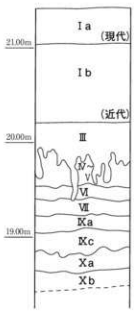
第３節　基本層序と調査の成果

１　基本層序（第７図）

第192-2地点及び第192-3地点の調査区のうち、立川ローム層をよく残している地点は少なかった。基本層序として第７図に示したのが、第192-2地点の北部で確認した層序である。表層のⅠ層は２層に別れ、Ⅰa層が旧県営住宅建設時の整地層、Ⅰb層が明治期遺構の整地層である。下総台地で一般的に見られるⅡ

層は撹乱の影響によって調査区全域でほぼ失われており、第192-1地点でわずかに確認されている。

それ以下は、下総台地で一般的な立川ロームⅢ層以下が確認されている。立川ロームⅢ層の残り具合から、この地点付近が台地上ではやや低かった可能性があり、明治期の軍施設の建設に伴い客土されて地面のかさ上げが行われていると思われる。



Ⅰa層　現代の整地層である。主に旧県営住宅の建設に伴うもの。様々な瓦礫が混在。
Ⅰb層　明治期以降に、軍施設建設による客土層
Ⅲ層　黄褐色土　いわゆるソフトローム層である。Ⅳ層以下の深い部分まで膨軟化している。
Ⅳ層　褐色土　Ⅴ層よりもやや明るい。赤色スコリアを含む。遺存はよくない。
Ⅴ層　褐色土　第1黒色帯。赤色・灰色などのスコリアを含む。
Ⅵ層　黄褐色土　ＡＴ（姶良丹沢パミス）を含む。
Ⅶ層　褐色土　Ⅵ層が一部拡散している。赤色・灰色・黒色スコリアなどを含む。
Ⅹa層　暗褐色土　第2黒色帯上部。
Ⅹc層　黒褐色土　第2黒色帯下部。やや黒味が強いが、上部との差はあまりない。
Ⅹa層　明褐色土　橙色スコリアを含む。
Ⅹb層　暗褐色土　Ⅹa層よりも暗色。

第7図　基本層序

2　調査の成果（第8・9図、第2表）

すでに報告されている第192-1地点を含め第192地点の全域が、近代以降の造成などによって著しく撹乱されており、検出された遺構は損壊が顕著で、一部では立川ロームの下部層に及ぶ撹乱も確認されている。今回報告する第192-2・3地点の発掘調査では、縄文時代から奈良・平安時代の遺構・遺物が検出されている。

縄文時代の遺構としては、早期と考えられる陥穴3基が検出されている。弥生時代では、後期の竪穴建物跡6棟が検出されている。いずれも遺構の遺存が悪く、遺物も微量である。古墳時代では、7世紀代の後期竪穴建物跡8棟が検出されている。いずれも遺構の遺存は悪い。奈良・平安時代では、竪穴建物跡1棟、掘立柱建物跡6棟、版築遺構1棟、溝状遺構7条のほか、土坑3基などが検出されている。このうち掘立柱建物跡については、2棟が特殊な4条の布掘りを伴うもので注目される。また版築遺構は損壊が著しく建物規模がはっきりしないが、千葉県内では検出例が限られるものであることから、土層断面の転写（剥ぎ取り）を実施した。溝状遺構のうち2条は、南北に走る大溝で官衙関連の施設と考えられる。第2表に検出された遺構の一覧を掲載した。なお、すでに報告済みの第192-1地点の成果としては、弥生時代後期の竪穴建物跡4棟、奈良・平安時代の溝を伴う道路跡1条が検出されている。

注
1　1902（明治35）年刊行
2　1902（明治35）年～1904（明治37）年刊行（推定）

第２表　遺構一覧表

通し番号	遺構番号	遺構種別	時　代	位　置	長軸（m）	短軸（m）	深さ（m）	備　考
1	（3）SK002	陥穴	縄文時代	3F－67	2.9	0.71	0.9	
2	（3）SK003	陥穴	縄文時代	3F－74	2.81	0.38	1.0	
3	（3）SK004	陥穴	縄文時代	3F－54	1.96	0.65	1.4	
4	（2）SI006	竪穴建物跡	弥生時代後期？	2C－57	5	－	0.21～0.28	
5	（3）SI001	竪穴建物跡	弥生時代後期	3E－41	－	7.2	0.08～0.16	
6	（3）SI002	竪穴建物跡	弥生時代後期？	3D－39	－	－	0.4	
7	（3）SI012	竪穴建物跡	弥生時代後期	4F－04	5.3	4.3	0.36～0.40	
8	（3）SI013	竪穴建物跡	弥生時代後期	3F－93	5.2	4.6	0.16～0.22	
9	（3）SI015	竪穴建物跡	弥生時代後期	3E－70	5.6	－	0.3	
10	（2）SI001	竪穴建物跡	古墳時代？	2D－60	5.6	－	0.28～0.40	
11	（2）SI004	竪穴建物跡	古墳時代？	2D－64	－	－	0.4	
12	（2）SI005	竪穴建物跡	古墳時代	2C－43	5.1	4.5	0.26～0.29	
13	（3）SI007	竪穴建物跡	古墳時代	3E－68	6.8	6.8	0.24～0.56	
14	（3）SI009	竪穴建物跡	古墳時代	3F－52	5.1	－	0.51～0.54	
15	（3）SI011	竪穴建物跡	古墳時代	3E－44	－	－	0.28～0.35	
16	（3）SI014	竪穴建物跡	古墳時代	3E－95	3.1	3.1	0.33～0.42	
17	（3）SI016	竪穴建物跡	古墳時代	4F－38	－	－	0.2	
18	（2）SI003	竪穴建物跡	奈良・平安時代	2D－45	－	－	0.2	
19	（2）SB002	布掘り掘立柱建物跡	奈良・平安時代	2D－44、54	－	－	－	
20	（3）SB004	布掘り掘立柱建物跡	奈良・平安時代	3D－99～3E－91	－	－	－	
21	（3）SB001	掘立柱建物跡	奈良・平安時代	3F－72、82	9.6	4.8	－	
22	（3）SB002	掘立柱建物跡	奈良・平安時代	3E－34、44	6	4.8	－	
23	（3）SB003	掘立柱建物跡	奈良・平安時代	3E－79、89	9.6	4	－	
24	（3）SB005	掘立柱建物跡	奈良・平安時代	4F－12	6	－	－	
25	（3）SK008	土坑	奈良・平安時代	3E－81	1.2	1.2	0.7	（3）SB004 関連施設か
26	（3）SK009	土坑	奈良・平安時代	3E－91	1.2	1.2	0.7	（3）SB004 関連施設か
27	（3）SA001	柱穴列	奈良・平安時代	3F－63	1.6	－	－	
28	（3）SX002	柱穴列	奈良・平安時代	3F－54	6	－	－	
29	（3）SX001	版築遺構	奈良・平安時代	3E－40、41	－	－	－	
30	（2）SD001	溝状遺構	不明	2C－58～2D－51	8	0.8（幅）	0.2	
31	（3）SD001	溝状遺構	不明	3E－59	－	0.8（幅）	0.2	
32	（3）SD002	溝状遺構	不明	3E－49	－	1.0（幅）	0.2	
33	（3）SD004	大型溝状遺構	奈良・平安時代	3F－45～4F－25	－	3.6（幅）	2.0	
34	（3）SD005	溝状遺構	不明	3F－80～4F－10	－	0.8（幅）	0.2	
35	（3）SD006	溝状遺構	不明	4F－01	－	1.0（幅）	0.2	
36	（3）SD007	大型溝状遺構	奈良・平安時代	3G－61～4G－31	－	1.4～2.6	1.0～0.7	
37	（3）SX006	土坑	奈良・平安時代	3D－69	－	－	0.2	
38	（2）SK001	土坑	奈良・平安時代か	2C－46	1	0.8	0.4	
39	（2）SK002	土坑	奈良・平安時代か	2C－59	0.8	0.8	0.5	

参考文献

市川市教育委員会　2015『図説　市川の歴史』第二版

市川市史編さん歴史部会（古代）下総国戸籍研究グループ編　2014『市史編さん事業調査報告書 下総国戸籍 遺跡編』市川市

角川日本地名大辞典編纂委員会　1984『角川日本地名大辞典　12　千葉県』

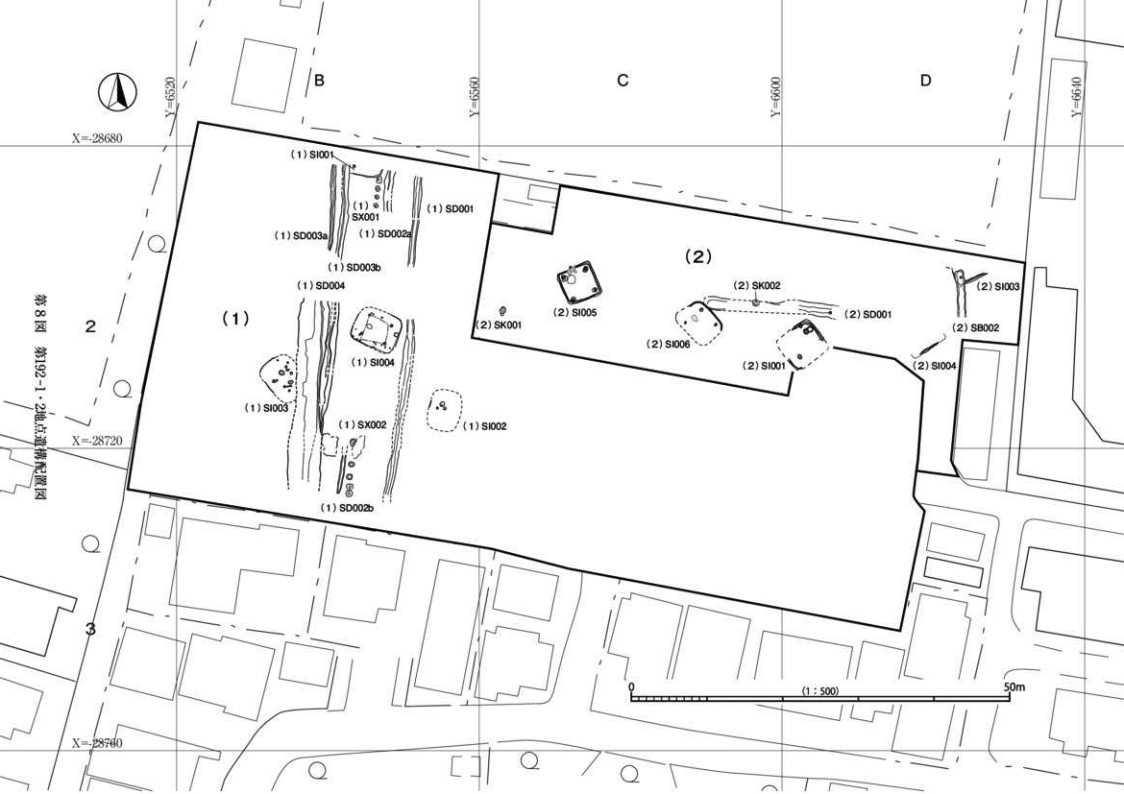
公益財団法人千葉県教育振興財団　2014『市川市北下遺跡（9）～（12）』第730集

千葉県教育委員会　2019『市川市国府台遺跡192地点－国府台県営住宅建替事業埋蔵文化財発掘調査報告書１－』第30集

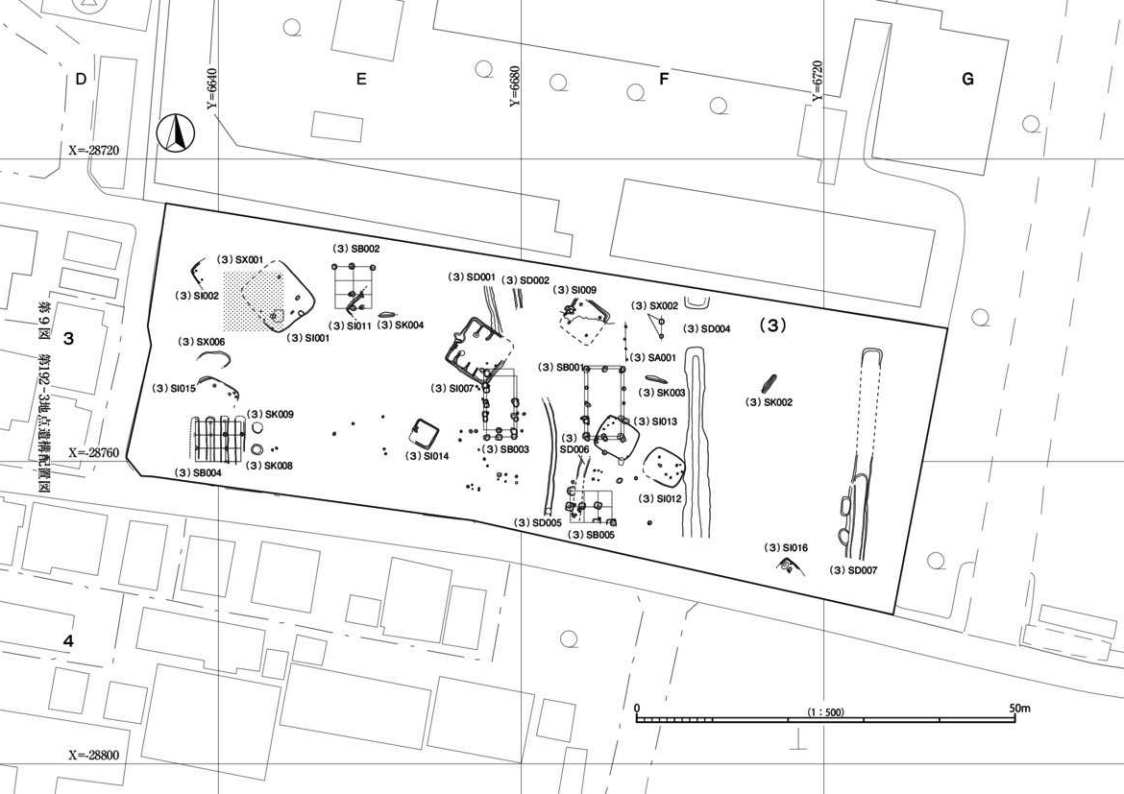
野口孝俊・浦本康二・鈴木　武　2015「明治期に建設された東京湾砲台群における煉瓦の調達に関する一考察－第二海堡跡煉瓦構造物調査－」「土木学会論文集D2（土木史）」Vol.71　No.1　1－10

公益財団法人かながわ考古学財団　2015『小原台堡塁跡・小原第３遺跡　第１次調査－防衛大学校食堂棟新設に伴う発掘調査－』

横須賀市教育委員会　2017『平成26・27年度新指定重要文化財等調査報告　近代化遺産・近代遺跡調査概報集Ⅸ　埋蔵文化財発掘調査概報集XXⅢ』



第8図 第192-1・2地点遺構配置図



第6図 特19区-3地点遺構配置図

第２章　縄文時代の遺構と遺物

第１節　概要

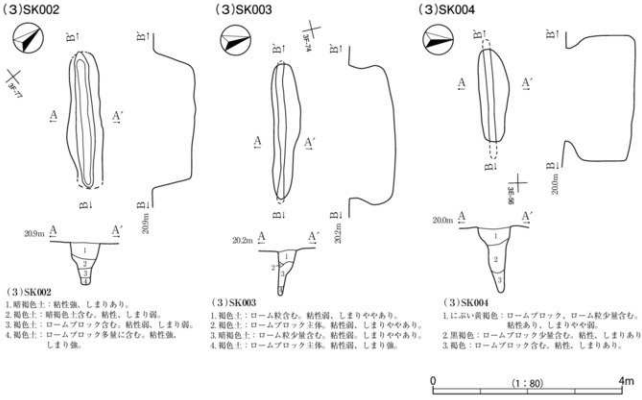
縄文時代早期と考えられる陥穴３基が検出されている。第１章でも記したように、調査区全域で近・現代の撹乱を大きく受け、千葉県北西部の下総地域内で一般的に見られる、縄文時代の遺物を包含するⅡ層がほとんど失われていることから、その痕跡は希薄なものとなっている。周辺は堀之内貝塚をはじめ縄文時代の集落や貝塚などの遺跡が密に分布している地域であることから、国府台遺跡内にも縄文時代の集落跡が存在していた可能性は高い。検出された陥穴は、いずれも平面の形態が、長楕円形で幅の狭いものであることから縄文時代早期の陥穴と考えられる。長軸方位は概ね西方向を向いている。

遺物については、わずか１点だが、後期の土器が出土している。遺物の少なさから、今回の調査範囲には本来縄文の遺構が少なかった可能性を示唆している。

第２節　遺構と遺物

（３）ＳＫ００２（第10図、図版13）

3F-67グリッドで検出された。不整長楕円形を呈する。主軸方向はＮ-66°-Ｗである。短軸方向の断面はＶ字形を呈し、底面はほぼ水平だが、横幅は足がやっと入る狭いものである。壁の中段で傾斜の角度が変わっている。長軸長2.90m、短軸長0.71m、検出面からの深さ0.88mを測る。底面の長軸長は2.64m、短軸長0.09mである。



第10図　（３）SK002・（３）SK003・（３）SK004

覆土は、ロームを多量に含む褐色土からなり、立川ローム層のハードロームが壁から剥落したものが覆土の主体となっている。出土遺物は皆無であった。

(3) ＳＫ００３(第10図、図版13)

3F-74グリッドで検出された。不整長楕円形を呈する陥穴である。主軸方向はN-76°-Wである。短軸方向の断面はV字形を呈し、底面は両端に向かって高くなり、横幅は足がやっと入る狭さである。北側壁は直線的に傾斜しているが、両壁は途中で段を伴っている。長軸両端がオーバーハングしている。長軸長2.81m、短軸長0.38m、検出面からの深さ0.99mを測る。底面の長軸長は2.94m、短軸長0.08mである。

覆土は、ロームを多量に含む褐色土からなり、立川ローム層のハードロームが壁から剥落したものが覆土の主体となっている。出土遺物は皆無であった。

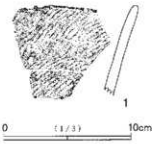
(3) ＳＫ００４(第10図、図版13)

3E-54グリッドで検出された。長楕円形を呈する陥穴である。主軸方向はN-86°-Eである。短軸方向の断面はV字形を呈し、底面はほぼ平らだが横幅は狭い。長軸両端がオーバーハングし、直に立ち上がって、検出面近くですぼまっている。長軸長1.96m、短軸長0.65m、検出面からの深さ1.36mを測る。底面の長軸長は2.62m、短軸長は0.09mである。

覆土は、ロームを多量に含む褐色土からなり、立川ローム層のハードロームが壁から剥落したものが覆土の主体となっている。出土遺物は皆無であった。

第３節　遺構外出土遺物(第11図、図版18)

縄文時代の遺物は、土器１点である。後期加曽利B2式～B3式の粗製土器で、外反しながら広がる深鉢であろう。口縁部は緩い波状縁を呈する。外面に無節Ｌ縄文が横位に施文されている。内面の調整は丁寧に行われている。



第11図　縄文時代遺構外出土遺物

第３章　弥生時代の遺構と遺物

第１節　概要

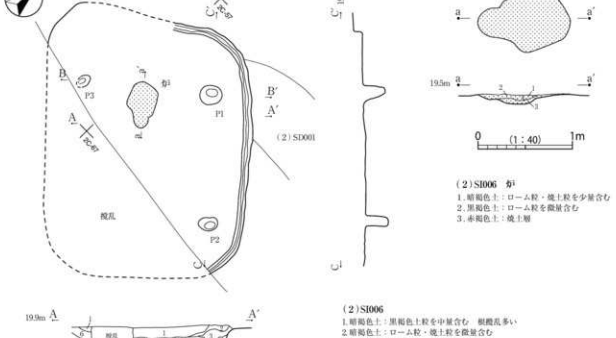
弥生時代の竪穴建物跡が６棟検出された。今回の調査範囲全域でまばらな検出状況となっている。近・現代の造成に伴う撹乱の影響で、遺構は顕著な損壊を受けている。このことから、本来存在していた遺構の多くは失われている可能性が高く、弥生時代集落の状況を把握することは難しい。今回検出された竪穴のうちの１棟は、短軸方向7.2mの大型の竪穴建物跡であり、特筆される。出土遺物などから弥生時代後期の竪穴群が主体となっており、既に報告された第192-1地点でも、弥生時代後期の竪穴建物跡４棟が検出されており、国府台遺跡の東京湾側台地には広く後期集落が展開していたことが推測される。

出土遺物については、大規模な撹乱の影響もあるが、遺構内からの遺物の出土量は少なく、撹乱層からの遺物の出土量も少なかった。

第２節　竪穴建物跡

(2)ＳＩ００６（第12図、図版３）

位置・形態　2C-57グリッドを主体として検出された。近・現代の撹乱により北西・南西壁側大部分と南東壁側が大きく削平され、竪穴の40%ほどが損壊している。平面形態は隅丸の長方形が想定される。規模



第12図　(2)SI006

は長軸方向で推定4.4mである。主軸方位はN－40°－Wである。炉は中央やや北西寄りに設けられ、検出面から床面までの深さは、北西壁21cm、北東壁28cmである。

覆土　上層は暗褐色土、下層は黒褐色土で、いずれもロームブロック、ローム粒を含む。焼土及び炭化物が全体的に混入している。

施設等　ピット３基と周溝、炉が検出された。P1 ～ P3は規則的に配列されており、主柱穴と考えられる。P1は長軸方向40cm、短軸方向32cmの楕円形で、床面からの深さが42cmである。P2は長軸方向40cm、短軸方向24cmの楕円形で、床面からの深さが49cmである。P3は長軸方向40cm、短軸方向20cmの楕円形で、床面からの深さが54cmである。周溝は幅12cm、床面からの深さ３cmで全周する。炉は長軸方向56cm、短軸方向36cmの不定形で、床面からの深さ８cmである。覆土は、上層がロームと焼土混じりの暗褐色土で、下層が焼土主体の赤褐色土である。

遺物出土状況　出土量は微量である。覆土から弥生土器が出土しているが、いずれも細片で時期を特定できない。

出土遺物　図示できるものはなく、出土した破片では時期を特定できなかったが、本竪穴は周辺の状況から弥生時代後期と推測される。

(3)ＳＩ００１（第13図、図版４・18）

位置・形態　3E－41グリッドを主体に検出された。古代の掘込地業が行われた版築遺構（(３)SX001）によって、竪穴の床面近くまで失われていたほか、近・現代の撹乱により遺構上部と北側が失われており、竪穴の南側の壁と床面の一部が失われている。平面形態は隅丸の長方形が想定され、規模は短軸方向7.2m、長軸方向の推定規模は8.2mであることから大型の竪穴と考えられる。主軸方位はN－40°－Wである。検出面から床面までの深さは、南東壁16cm、北東壁８cmで、遺存状態は悪い。

覆土　(３)SX001の掘込地業による掘削や近・現代以降の撹乱により、一部が遺存するのみである。床面近くの覆土は、ロームブロック、ローム粒を多量に含む暗褐色土を主体とする。

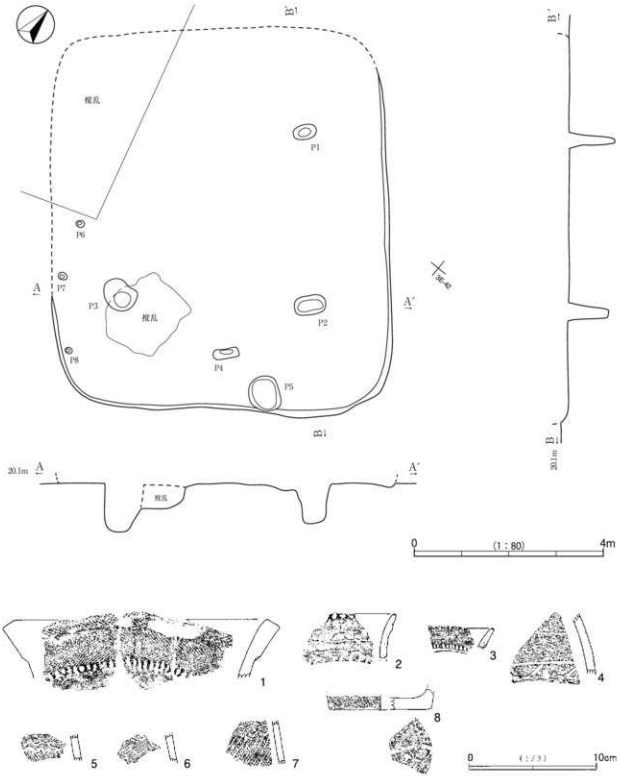
施設等　ピット７基、貯蔵穴１基が検出された。炉は撹乱が中央の床面にまで及んでいることから、失われている。ピットのうちP1 ～ P3は規則的に配列されており、主柱穴と考えられ、大型の竪穴に一般的に見られる楕円形の柱穴である。P1は、長軸方向48cm、短軸方向24cmの楕円形で、床面からの深さが96cmである。P2は、長軸方向60cm、短軸方向40cmの楕円形で、床面からの深さ84cm、P3は、後世の撹乱により上部は削平されており径64cmの不定形、床面からの深さ100cmである。P4は南東壁近くから検出された。長軸方向56cm、短軸方向16cmの楕円形で、床面からの深さが37cmあり、入口の梯子ピットと考えられる。P5は南東壁に位置する。径72cmの隅丸方形で、床面からの深さ17cmであり、いわゆる貯蔵穴と考えられる。

その他ピットについて、P6は径15cm、床面からの深さ20cm、P7は径16cm、床面からの深さ20cm、P8は径12cm、床面からの深さ30cmで、いずれも南西壁側に位置する。

遺物出土状況　出土量は少量で、南東部のわずかに覆土が残る範囲から土器が出土している。

出土遺物　図示できた遺物は、弥生土器８点で壺と甕が出土している。１は外反する分厚い角頭状の口縁部で、外面に羽状縄文を施文し、下端に連続するキザミが施されている。２は甕の口縁部で輪積痕を残している。口唇部には連続したキザミが施されている。３は折返し口縁の広口壺であろう。口唇部と折返し口縁の下端に連続したキザミが施されている。４は壺の胴部である。２本の横位の沈線で上下を区画し、網目状文を施している。５～７は広口壺であろう。５は２段の結節縄文と附加条の縄文が施されている。

6は櫛による波状文が施されている。8は底部である。外面に縄文を施し、底部に木葉痕がある。
出土遺物から、本竪穴は弥生時代後期と考えられる。



第13図　(3)SI001

(3)ＳＩ００２(第14図、図版４)

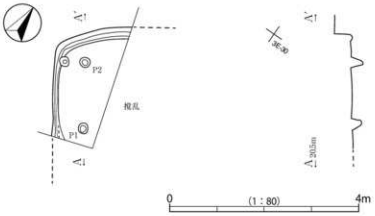
位置・形態　3D-39グリッドを主体に検出された。近・現代の撹乱によって竪穴の大部分が失われ、竪穴の北西隅のみが遺存している。平面形態は隅丸の長方形を呈すと想定されるが、主軸方位、規模ともに不明である。検出面から床面までの深さは、36㎝である。

覆土　撹乱により遺構は大きく削平されて遺存せず、堆積状況は不明である。

施設等　ピット３基と周溝が検出された。撹乱により、炉などは検出されなかった。P1は径24㎝の円形で、床面からの深さ22㎝、P2は径20㎝の円形で、床面からの深さ28㎝、P3は径16㎝の円形で、床面からの深さ26㎝である。いずれも主柱穴ではないと考えられる。周溝が確認され、幅10㎝～16㎝、床面からの深さ４㎝である。

遺物出土状況　近・現代の撹乱によって、遺構に伴う遺物は皆無である。

出土遺物　図示できた遺物はなかった。本竪穴の時期は、覆土や竪穴の形態から弥生時代後期と推測される。



第14図　(3)SI002

(3)ＳＩ０１２(第15図、図版５・18)

位置・形態　4F-04グリッドを主体に検出された。南西隅が近・現代の撹乱により削平され、東側は(3)SD004と重複する。新旧関係は(3)SI012 →(3)SD004である。平面の形態は隅丸の長方形を呈し、規模は5.3m×4.3mである。炉は中央やや北西寄りで検出された。主軸方位はＮ-61°-Wである。検出面から床面までの深さは、北東壁40㎝、北西壁36㎝、南西壁38㎝、南東壁36㎝である。

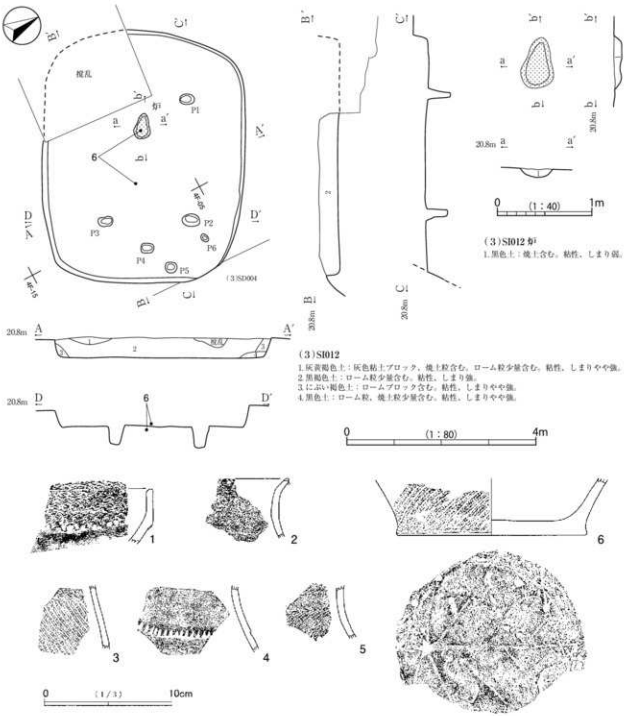
覆土　ロームを少量含む黒褐色土を主体とする。

施設等　ピット６基と炉が検出された。P1～P3は規則的に配列されており、主柱穴と考えられる。P1は長軸方向30㎝、短軸方向20㎝の楕円形で、床面からの深さ48㎝である。P2は長軸方向36㎝、短軸方向24㎝の楕円形で、床面からの深さ44㎝である。P3は長軸方向32㎝、短軸方向16㎝の楕円形で、床面からの深さ40㎝である。P4は南東壁近くから検出された。床面からの深さが19㎝あり、入口の梯子ピットと考えられる。その他のピットについては、P5は直径20㎝、床面からの深さ21㎝、P6は径14㎝、床面からの深さ６㎝である。炉は長軸長60㎝、短軸長32㎝の不定形で、床面からの深さは６㎝である。覆土は焼土粒を含む黒色土である。

遺物出土状況　出土量は少ない。中央及び炉周辺の覆土中からまとまって出土している。

出土遺物　図示できた遺物は、弥生土器６点で、壺及び甕からなっている。１は壺の口縁部で直に立ち上がっている。口唇部及び外面に多段の結節縄文を施し、下端に間隔のあいたキザミを施している。２は甕の口縁部である。口唇部に内外面から交互のキザミが施されている。３は壺の胴部である。附加条の縄文を施文している。４は甕の胴部である。輪積痕を残し、連続したキザミを施している。５は壺である。横位の幅の狭いLR単節縄文を施している。６は大型の広口壺であろう。底部まで附加条の縄文を施している。底面には大きな木葉痕が認められる。

出土遺物から、本竪穴は弥生時代後期と考えられる。



第15図　(3)SI012

(3)ＳＩ０１３(第16図、図版５・18)

位置・形態　3F-93グリッドを主体に検出された。古代の掘立柱建物跡(3)SB001の柱穴と重複する。言うまでもないが、(3)SI013の方が古い。平面形態は隅丸のやや長方形を呈し、規模は5.2m×4.8mある。主軸方位はN-60°-Wである。検出面から床面までの深さは、北東壁22cm、北西壁16cm、南西壁20cm、南東20cmで、遺存状態は他と比べれば良い方である。

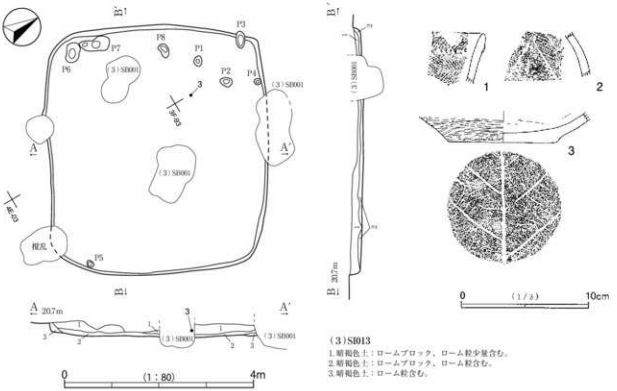
覆土　ロームブロック、ローム粒を含む暗褐色土を主体とする。床面付近では、ロームブロック、ローム粒を多量に含む。

施設等　ピット８基が検出された。炉は検出できなかったが、(3)SB001の柱穴が竪穴中央付近を床面まで掘り込んでおり、その部分に炉が存在した可能性が高い。ピットは南東壁側のP5を除けば、北西壁側で検出されている。床面からの深さは、P1が９cm、P2が10cm、P3が12cm、P4が６cm、P5が11cm、P6が41cm、P7が49cm、P8が13cmといずれも浅く、主柱穴と呼べるものではない。

遺物出土状況　出土量は少ない。北西壁面側の覆土中から出土している。

出土遺物　図示できた遺物は、弥生土器３点である。１・２は壺、３は大型の広口壺などであろう。１は口縁部片である。口縁部外面及び頸部に縄文を施し、段の部分に連続したキザミが施されている。２は胴部である。鋸歯文が施され、区画内に縄文を充填し、さらに赤彩されている。３は大型の広口壺の底部である。外面は横方向のナデ、その後ミガキを施している。底部に木葉痕がはっきりと確認できる。

出土遺物から、本竪穴は弥生土器後期と考えられる。



(3)SI013
1.明褐色土：ロームブロック、ローム粒少量含む。
2.明褐色土：ロームブロック、ローム粒含む。
3.明褐色土：ローム粒含む。

第16図　(3)SI013

（3）ＳＩ０１５（第17図、図版５・18）

位置・形態　3E-70グリッドを主体に検出された。近・現代の撹乱により南側の約半分が失われている。平面の形態は隅丸の長方形と推測される。長軸長は5.8mである。主軸方位はN-62°-Wである。検出面から床面までの深さは、北東壁で26cmである。

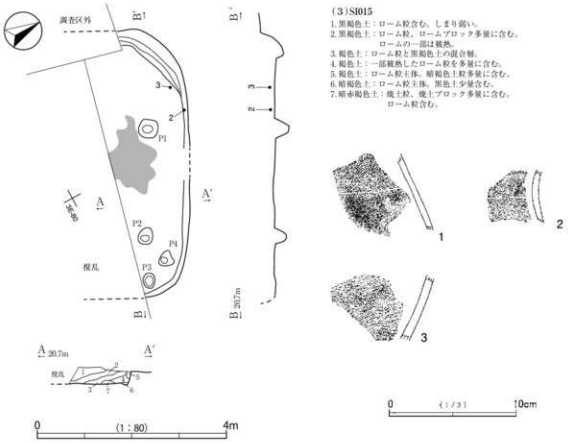
覆土　ロームブロック・ローム粒を含む黒褐色土を主体とする。竪穴中央の覆土中に焼土が混入していた。焼失住居の可能性がある。

施設等　ピット４基が検出された。遺構の大部分が撹乱により損壊しており、炉は検出されなかった。P1・P2は主柱穴と考えられる。P1は直径38cmの円形で床面からの深さ30cm、P2は直径32cmの円形で床面からの深さ22cmである。P3は直径32cmの楕円形で床面からの深さ10cm、P4は直径32cmの不定形で、床面からの深さは10cmである。P3はいわゆる貯蔵穴と思われる。

遺物出土状況　出土量は少ない。北西隅の覆土中からわずかに出土している。

出土遺物　図示できた遺物は、弥生土器３点である。１～３は壺である。１は壺の頸部下端である。上下を沈線で区画していると思われ、羽状縄文を充填している。２も壺の頸部下端で沈線区画した中に縄文を充填している。３は壺の胴部である。附加条の縄文が施されている。

出土遺物から、本竪穴は弥生時代後期前葉と考えられる。



第17図　（3）SI015

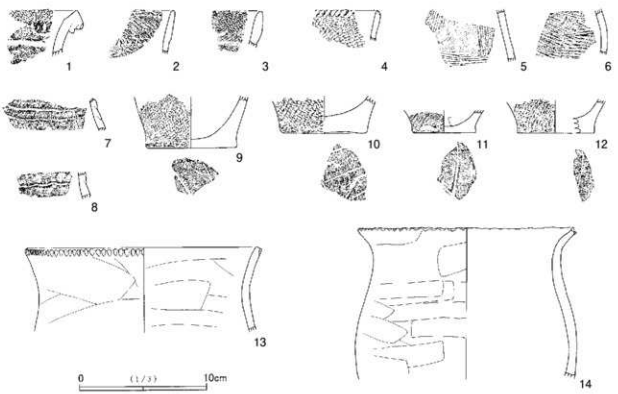
第３節　遺構外出土遺物

１　概要

弥生時代の遺構外出土遺物は、弥生土器に限られている。いずれも小片で、図示できるものは少なかった。ほとんどが撹乱層中からの出土であり、竪穴建物跡の時期と同様に弥生時代後期のものに限られている。このことから、後期の竪穴建物群が濃密に分布している可能性は低いと推測される。

２　出土遺物（第18図、図版18）

第18図１～14は全て後期の弥生土器である。１～６は壺である。１は折り返し口縁で角頭状を呈する。口唇部に縄文を施文して、キザミを伴っている。２・３は口縁部が肥厚しており、２は外面に附加条縄文、３は羽状縄文が施されている。３には焼成前と思われる穿孔がわずかに確認できる。４は外面にRLの単節縄文が施されており、口唇部に連続したキザミを伴う。５は壺の胴部上半である。４～５本一組の櫛による横位の条線と等間隔に縦の条線が施されている。６は壺の胴部破片であろう。横位の条痕が施されている。７・８は甕である。頸部の輪積痕である。９～12は壺の底部である。いずれも附加条縄文を底部まで施文し、底部には木葉痕が認められる。13・14は甕である。13は内外面ナデ調整、口唇部にキザミを伴う。14は口唇部に交互のキザミを施している。内外面ナデ調整である。



第18図　弥生時代遺構外出土遺物

第４章　古墳時代の遺構と遺物

第１節　概要

古墳時代と考えられる竪穴建物跡が８棟検出されている。出土した遺物から、１棟は７世紀末～８世紀前葉に下る可能性があるが、その他は６世紀後葉～７世紀後半の古墳時代後期と考えられる。大きな撹乱の影響もあるが、調査区全域に散漫に分布している。

遺構の遺存状態は、いずれも良くない。近・現代の撹乱によるもので、この時代の竪穴建物跡群については、本来はある程度の密度で分布していたのではないかと推測される。ただし、撹乱層から出土したこの時期の遺物量が限られていることから、国府台遺跡の北側の集落に比べれば、濃い密度であったとは考えにくい。

各竪穴建物跡内で検出されたカマドは総じて北西方向の壁に設置されている。竪穴からの遺物量は、大型の竪穴１棟を除けば少なかった。

第２節　竪穴建物跡

(2) ＳＩ００１（第19図、図版３・14）

位置・形態　2D-60グリッドを主体に検出された。近・現代の撹乱によって東西のコーナーが大きく失われている。平面形態は、一辺5.6mの方形を呈していたと考えられる。カマドは撹乱により削平され確認できなかったが、北西壁側で山砂や焼土、炭化物が確認できることから北西壁中央に設置されていたと考えられる。主軸方位はN－40°－Wである。検出面から床面までの深さは、南西壁40cm、北東壁28cmである。

覆土　暗褐色土を主体とし、焼土及び炭化材が全体的に混入している。

施設等　ピット３基と周溝が検出された。P1・P2は規則的に配列されており、主柱穴と考えられる。床面からの深さはP1が60cm、P2が81cmである。P3は直径32cm、床面からの深さ10cmである。周溝は全周すると考えられる。周溝の幅は20cm～ 28cm、床面からの深さは20cmである。

遺物出土状況　出土量は微量である。図示できた遺物のうち須恵器坏は竪穴範囲の撹乱層中から出土している。

出土遺物　図示できた遺物は、須恵器坏１点、土師器坏１点である。１は須恵器坏の口縁部片である。推定口径15.2cmである。体部は直に立ち上がる。体部の内外面はロクロ成形である。底部には高台が付いていたかもしれない。２は土師器坏である。推定口径11.1cmである。体部外面は手持ちヘラケズリである。

図示した土器は、７世紀末～８世紀代前半であり、これらが竪穴に伴うとすれば、本竪穴が奈良時代に入る可能性もある。

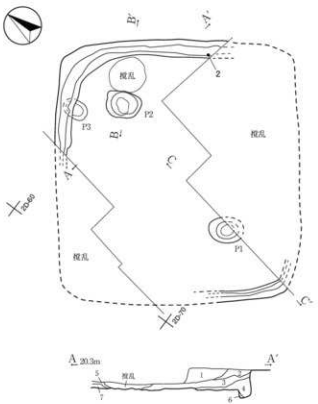
(2) ＳＩ００４（第19図、図版３）

位置・形態　2D-64グリッドを主体に検出された。近・現代の撹乱により大部分が失われており、南東壁の一部分のみが遺存している。平面形態は方形と推測されるが、規模は不明である。検出面から床面までの深さは、南東壁41cmである。

覆土　ロームブロック、ローム粒を含む暗褐色土を主体とする。

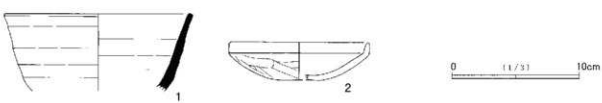
施設等　周溝のみ検出された。周溝は幅16cm、床面からの深さ16cmである。

(2)SI001

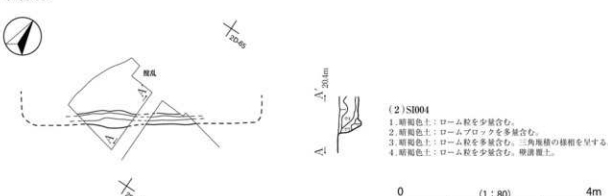


(2)SI001

1. 暗褐色土：ロームブロック微量、ローム粒を少量、炭化物粒を微量含む。
2. 暗褐色土：ローム粒を含む。
3. 暗褐色土：ロームブロックを少量、ローム粒を少量含む。
4. 黒褐色土：ロームブロックを微量含む。
5. 暗褐色土：炭化物を微量含む。
6. 暗褐色土：ロームブロックを多量含む。
7. 暗褐色土：山砂ブロックを多量含む。
8. 黒褐色土：ローム粒・ロームブロックを多量含む。
9. 黒褐色土：ローム粒・ロームブロックを多量含む。
10. 褐色土：ローム粒・ロームブロック・黒色土の混合土。
11. 暗褐色土：ローム粒・ロームブロックを多量含む。
12. にぶい黄褐色土：ローム粒・ロームブロックを多量含む。
13. 褐色土：炭化物粒を微量含む。
14. 暗褐色土：ローム粒・ロームブロック・黒色土の混合土。
15. 黄褐色土：ハードロームブロックを含む。
16. 黒色土：ローム粒を少量含む。粘性、しまりあり。
17. 暗褐色土：ロームブロック・粒を多量含む。粘性、しまりなし。



(2)SI004



(2)SI004

1. 暗褐色土：ローム粒を少量含む。
2. 暗褐色土：ロームブロックを多量含む。
3. 暗褐色土：ローム粒を多量含む。三角堆積の様相を呈する。
4. 暗褐色土：ローム粒を少量含む。壁溝覆土。

第19図　(2)SI001･(2)SI004

遺物出土状況　竪穴の一部しか検出できなかったことから、時期が判断できる遺物はなかった。

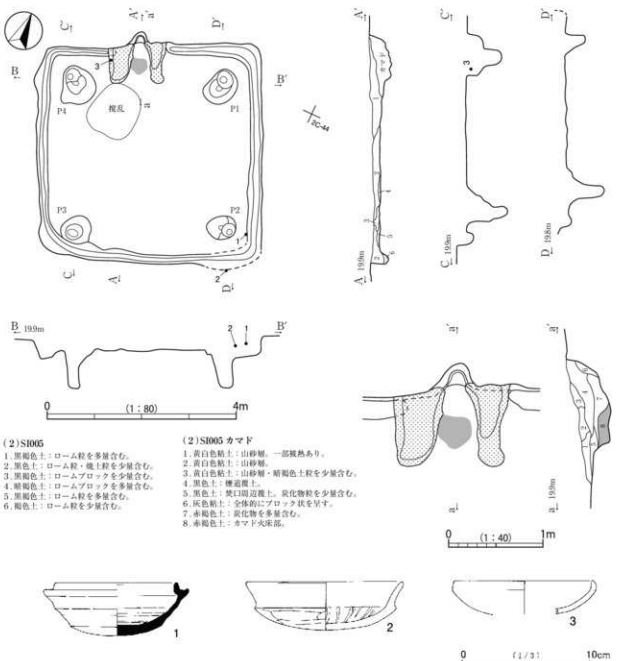
出土遺物　図示できる遺物はなく、周辺の遺構の状況から古墳時代後期と推測される。

(2)ＳＩ００５（第20図、図版３・14）

位置・形態　2C-43グリッドを主体に検出された。竪穴の上部は撹乱を受けていたが、ほぼ全体形を検出することができた。平面形態は方形を呈し、規模は4.8m×4.6mである。カマドは北西壁にあり、主軸方位はN-24°-Wである。検出面から床面までの深さは、北西壁27cm、西南壁５cm、南東壁26cm、北東壁29cmである。

覆土　ロームブロック、ローム粒を含む黒褐色土を主体とし、焼土が少量混入している。

施設等　ピット４基と周溝、カマドが検出された。P1～P4は主柱穴と考えられるが、一般的な竪穴建物



第20図　(2)SI005

の主柱穴位置よりも外側に寄っている。また、P1・P2・P4はそれぞれ２つのピットが認められることから、柱穴を対角線方向に外側に若干ずらして柱の建て直しが行われている可能性が高い。床面からの深さはP1が44cm、P2が76cm、P3が86cm、P4が74cmである。周溝はカマド部分を除いて全周し、幅20cm、床面からの深さは15cmである。カマドは、両袖ともに遺存し、火床部には焼土が厚く堆積していた。カマド煙道部の張り出しは小さい。

遺物出土状況　出土量は少ない。中央及びカマド周辺の床面直上から遺存状態の良い土器が出土している。

出土遺物　図示できた遺物は、須恵器坏１点、土師器坏２点である。１は須恵器坏である。口縁部が３分の１程度残存している。推定口径9.7cmで小型の坏である。ロクロ成形後、底部ヘラケズリである。２・３は土師器坏である。２は口縁部が８分の１程度残存し、推定口径12.3cmである。口縁部横ナデ、体部は手持ちヘラケズリ、内面はミガキ後、底部から放射状に広がる暗文が施されている。３は口縁部が２分の１程度残存し、口径11.0cmである。内面横ナデ、外面手持ちヘラケズリである。

出土遺物から、本竪穴の時期は、７世紀中葉～後半と考えられる。

(3)ＳＩ００７（第21～23図、図版４・14・15・18）

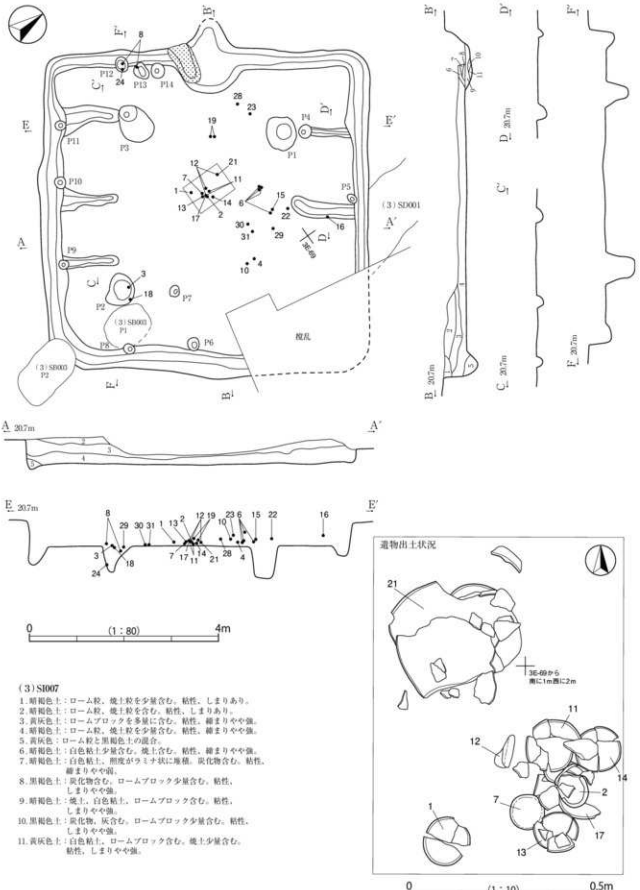
位置・形態　3E-68グリッドを主体に検出された。南東隅が近・現代の攪乱により失われているものの、今回の調査では最も遺存が良かった竪穴である。掘立柱建物跡（3）SB003の柱穴によって床面と壁の一部が壊されており、本竪穴の方が古いと判断される。平面の形態は方形を呈し、規模は6.8m×7.0mである。カマドは北西壁にあり、主軸方位はN-54°-Wである。検出面から床面までの深さは、北東壁56cm、北西壁46cm、南西壁24cm、南東壁50cmである。

覆土　ロームブロック、ローム粒を含む暗褐色～黄灰色土を主体する。焼土が全体的に混入していた。

施設等　ピット14基と周溝、カマド、間仕切り溝５条が検出された。P1～P3は規則的に配列されており、主柱穴と考えられる。いずれも直径48cm～50cmの不定形で、床面からの深さはP1が56cm、P2が60cm、P3が48cmである。その他のピットはP4とP7を除き間仕切り溝と関連が深いピットと考えられる。直径20cm～24cmの円形で床面からの深さは23cm～44cmである。周溝は全周し、幅20cm、床面からの深さ16cmである。カマドは左の袖のみが遺存している。カマド煙道部の張り出しはやや大きい。床面に間仕切り溝が検出されている。南西壁に３条、北東壁に２条、1.2m～1.5m間隔で検出されている。攪乱がなければ、左右３条の間仕切り溝が存在していた可能性が高い。各溝は周溝の連結部から約1.6mの長さがある。

遺物出土状況　竪穴が深く遺存が良かったことから、遺物量は多かった。図示したように竪穴中央の床面直上から、ほぼ完形の土師器・須恵器の蓋・坏類がまとまって出土している。出土土器の中に、口縁部が意図的に打ち欠かれているものがある。打ち欠かれた土器の出土状況には特徴的なまとまりはない。

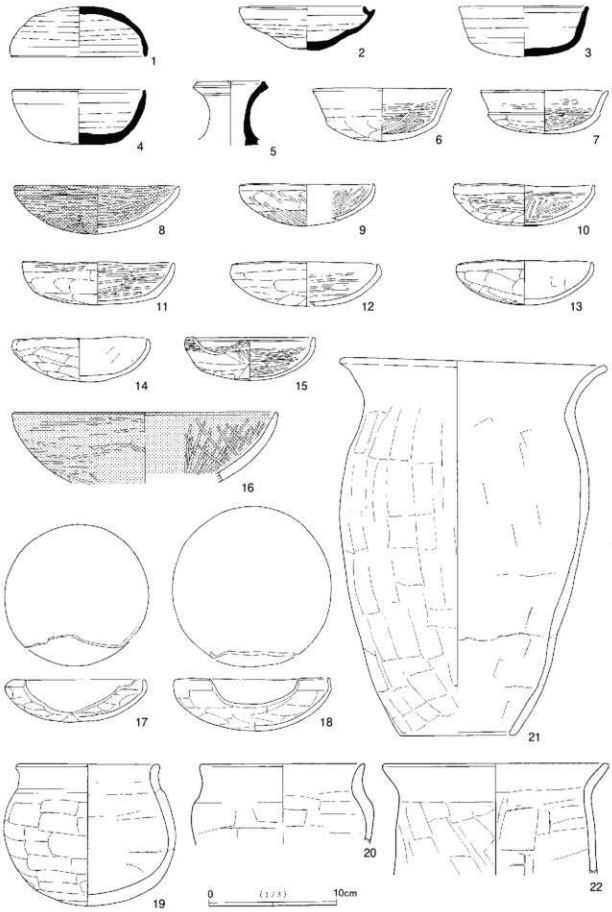
出土遺物　図示できた遺物は、須恵器５点、土師器18点、土製支脚２点、石器４点、スラグ１点、鉄製品６点である。製錬・鍛冶関連のスラグ、鉄製品が出土している点も特徴的である。１～５は須恵器である。１は須恵器蓋である。ほぼ完形で口径10.6cmである。底部はヘラ切り後回転ヘラケズリが行われている。口縁部の一部が意図的に打ち欠かれている。２～４は坏である。２はほぼ完形で、口径9.0cmである。小型品で受け部を持つもので、底部は不安定で尖り気味である。回転ヘラケズリされている。３は口縁部が３分の１残存し、推定口径10.2cmである。底部は回転ヘラケズリ調整である。４はほぼ完形で、口径10.5cmである。口縁内面は段を有する。ロクロ成形、底部は回転ヘラケズリ後丁寧なミガキが施され表面は滑らかである。５は壺の頸部である。口径5.4cmである。頸部は別作りでロクロ成形である。胴部の



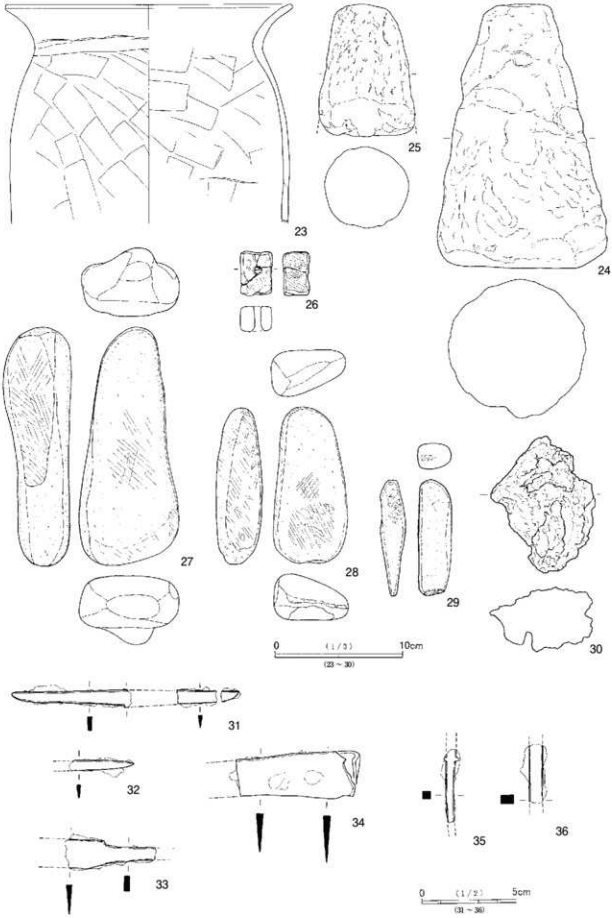
(3)SI007

1.暗褐色土：ローム粒、焼土粒を少量含む。粘性、しまりあり。
2.暗褐色土：ローム粒、焼土粒を含む。粘性、しまりあり。
3.黄灰色土：ロームブロックを多量に含む。粘性、締まりやや強。
4.暗褐色土：ローム粒、焼土粒を少量含む。粘性、締まりやや強。
5.黄灰色：ローム粒と黒褐色土の混合。
6.暗褐色土：白色粘土少量含む。焼土含む。粘性、締まりやや強。
7.暗褐色土：白色粘土。照度がラミナ状に堆積。炭化物含む。粘性、
締まりやや弱。
8.黒褐色土：炭化物含む。ロームブロック少量含む。粘性、
しまりやや強。
9.暗褐色土：焼土、白色粘土。ロームブロック含む。粘性、
しまりやや強。
10.黒褐色土：炭化物、灰含む。ロームブロック少量含む。粘性、
しまりやや強。
11.黄灰色土：白色粘土、ロームブロック含む。焼土少量含む。
粘性、しまりやや強。

第21図　(3)SI007(1)



第22図　(3) SI007(2)



第23図 (3) SI007(3)

成形に円盤閉塞技法を用いる。6～18は土師器坏である。6・7は底部と体部の境が明瞭な稜を持つものである。いずれも完形で、口径は6が10.8cm、7が10.2cmである。底部手持ちヘラ削り、内面は丁寧なミガキである。8は推定口径13.2cmで、内外面が赤彩されている。9～15・17・18は底部が手持ちヘラケズリ、内面は13・14を除きミガキ調整されている。9は4分の1が残存し、推定口径10.5cm、10は約半分残存し口径11.1cmである。11はほぼ完形で口径12.0cm、12は3分の4残存し、推定口径11.7cm、13は完形で口径10.8cm、14は完形で口径10.8cm、15はほぼ完形で口径10.2cmである。15は口縁部の一部が意図的に打ち欠かれている。16は鉢である。口縁部が8分の1残存し、推定口径20.7cmである。内外面に赤色塗彩が施され、内面は暗文が放射状に施されている。17は4分の3が残存し口径10.5cm、18はほぼ完形で口径12cmである。17・18ともに図示したように特徴的な口縁部の打ち欠きが認められる。19～23は土師器の甑・甕である。19・20は小型の甕である。19が完形で口径11.4cm、20が口縁部の破片で、推定口径12.9cmである。胴部ヘラケズリ、内面はナデ調整である。22・23は土師器甕である。22は口縁部破片で、形態から甑の可能性もある。推定口径17.7cmである。23は胴部下半と底部を欠いている。推定口径は22.5cmである。外面ヘラケズリ、内面はナデ調整である。21は甑である。口径21.0cmで、外面ヘラケズリ、内面ナデ調整である。24・25は土製の支脚である。24は完形でカマド内から出土している。25は上部のみ残存し、覆土内から出土している。26は穿孔のある小型の砥石である。石材は凝灰岩である。27～29は覆土中から出土した長楕円形の円礫である。27は長軸長18.7cm、28は長軸長12.2cm、29は長軸長9.0cmで、27は図の上部が持ちやすい形状で敲打痕もあることから石鎚のように使用された可能性がある。28は両端に敲打痕が認められる。29は棒状の円礫で、両端と側面に敲打痕があるほか、焼けた痕跡がある。鉄製品及びスラグが出土しており、鍛冶関連の道具の可能性がある。30は鉄の含有量が多いと推測されるスラグで、長軸長は10.8cm、最大厚5.6cm、重さ413.3gである。このほかにも小さなスラグが数点出土している。31～36は鉄製品である。31～33は刀子である。33は刃部の幅があり、大型の刀子である。34は鎌である。基部の折返しがわずかに残存している。35・36は鉄鏃である。いずれも基部である。これらの鉄製品とスラグなどから、本竪穴が製錬・鍛冶関連の施設であった可能性がある。出土した鉄製品は、生産された製品と思われるが、鉄材の可能性もあるかもしれない。ただし、鍛冶炉などの痕跡は確認されていない。

本竪穴の時期は、出土した須恵器などから7世紀中葉と考えられる。

(3)ＳＩ００９（第24・25図、図版4・15・18）

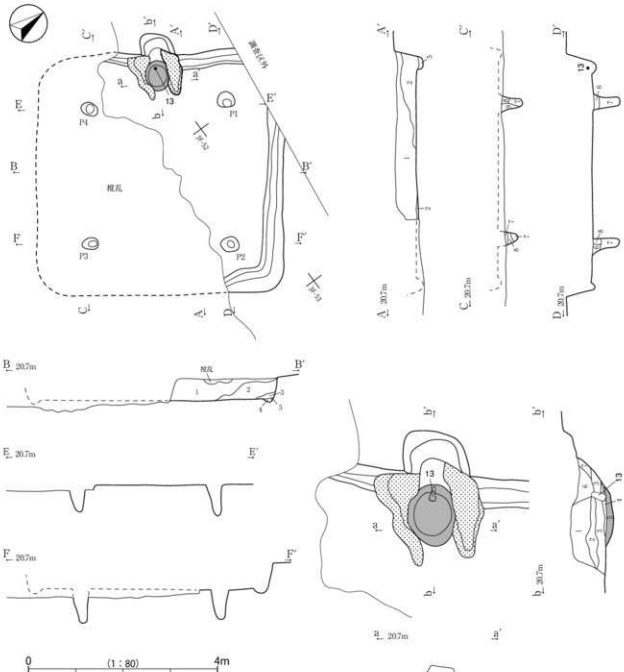
位置・形態　3F-52グリッドを主体に検出された。近・現代の攪乱により、南側約半分が失われている。平面の形態は方形を呈し、規模は長軸長が約5.1mである。カマドは北西壁にあり、主軸方位はN-54°-Wである。検出面から床面までの深さは、北壁52cm、西壁51cm、東壁54cmである。

覆土　ロームブロック、ローム粒を含む褐色～黒褐色土を主体とする。

施設等　ピット4基と周溝、カマドが検出された。P1～P4は規則的に配列されており、主柱穴と考えられる。床面からの深さはP1が68cm、P2が64cm、P3が52cm、P4が44cmである。周溝は全周していたと考えられる。残存する周溝の幅は24cm、床面からの深さ12cmである。北西壁のカマドは、袖部が両袖ともに遺存している。火床部には焼土が厚く堆積していた。火床部やや奥から支脚が立った状態で検出されている。

遺物出土状況　カマド周辺と遺構中央の覆土中からまとまって出土している。

出土遺物　図示できた遺物は、須恵器1点、土師器11点、土製支脚1点である。1は須恵器坏である。口縁部は3分の1が残存し、推定口径9.0cmである。受け部を伴い底面は丸底である。2～8は土師器坏である。



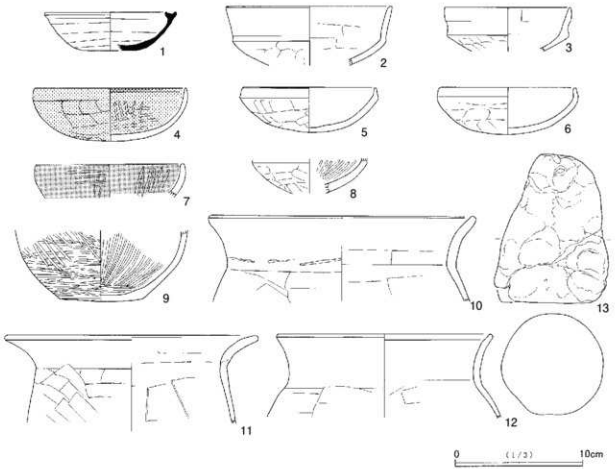
(3)SI009

1.黒褐色土：ロームブロック、ローム粒含む。粘性、しまり弱。
2.褐色土：ロームブロック含む。粘性、しまり弱。
3.黒褐色土：ローム粒少量含む。粘性、しまり弱。
4.褐色土：ロームブロック主体。粘性あり、しまり弱。
5.黒褐色土：ロームブロック少量含む。粘性なし、しまり弱。
6.暗褐色土：ロームブロック含む。粘性、しまり弱。
7.褐色土：ロームブロック多量に含む。粘性弱、しまりなし。
8.暗褐色土：ロームブロック少量含む。粘性、しまり弱。
9.褐色土：ロームブロック主体。

(3)SI009 カマド

1.褐色土：ロームブロック、炭化物少量含む。粘性、しまり弱。
2.暗褐色土：ロームブロック、ローム粒少量含む。粘性、しまり弱。
3.褐色土：灰白色土、ロームブロック含む。粘性、しまり弱。
4.灰褐色土：粘性、しまりなし。灰褐。
5.黒褐色土：炭化物、焼土含む。粘性、しまりなし。
6.褐色土：ロームブロック主体。灰白色土、焼土少量含む。粘性、しまり弱。
7.暗褐色土：ロームブロック含む。粘性、しまりなし。

第24図　(3)SI009(1)



第25図　(3) SI009(2)

いずれも破片で、底部は手持ちヘラケズリである。2・3は底部と体部の境に稜を伴う。4は口縁端部内面に沈線をめぐらす。2の推定口径は12.9cm、3の推定口径は9.9cm、4は推定口径は12.0cm、5の推定口径は10.5cm、6の推定口径は10.8cm、7の推定口径は11.7cmである。9は土師器小型甕の底部であろう。内外面ヘラミガキが施されている。10～12は土師器甕である。いずれも外面ヘラケズリ調整である。13は土製支脚である。

出土遺物から、本竪穴は7世紀中葉と考えられる。

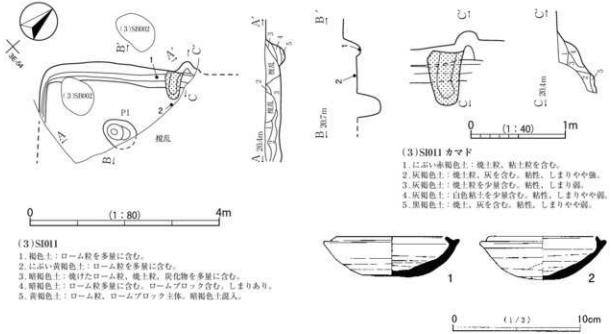
(3) S I 0 1 1（第26図、図版4・15）

位置・形態　3E-44グリッドを主体に検出された。近・現代の撹乱により遺構の大部分が削平され、遺存するのは北西壁と南西壁の一部の西側隅だけである。古代の掘立柱建物跡である（3）SB002の柱穴が床面の一部を壊している。規模は不明であるが、遺存箇所から平面形態は方形と推測される。主軸方位はN-47°-Wである。カマドは北西壁に約半分が残存している。検出面から床面までの深さは、北西壁35cm、南西壁28cmである。

覆土　ローム粒を多量に含む褐色～暗褐色土を主体とする。焼土や炭化物が全体的に混入していた。

施設等　ピット1基と周溝、カマドが検出された。P1は主柱穴と考えられる。P1は径56cm、床面からの深さ48cmである。周溝は幅10～16cm、床面からの深さ12cmである。北西壁のカマドは、片袖のみ遺存していた。カマド煙道部の張り出しは小さい。火床部には焼土と灰が堆積していた。

遺物出土状況　出土量は微量で、カマド周辺の覆土中から須恵器2点が破片で出土している。



第26図　(3) SI011

出土遺物　図示できた遺物は、須恵器２点である。１・２は小型の須恵器坏である。ともに受け部があり、受け部の形状が異なっている。１の推定口径は9.0cm、２の推定口径は8.7cmである。底部ヘラ切り後、回転ヘラケズリされている。

出土遺物より、本竪穴は７世紀中葉と考えられる。

(3) ＳＩ０１４（第27図、図版５・15）

位置・形態　3E-95グリッドを主体に検出された。西側隅が撹乱により失われている。平面の形態は方形を呈し、規模は3.1m×3.1mの小型の竪穴である。カマドは北西壁中央にあり、主軸方位はN-64°-Wである。検出面から床面までの深さは、北東壁35cm、北西壁33cm、南東壁34cm、南西壁42cmで、竪穴の遺存状態はよい。

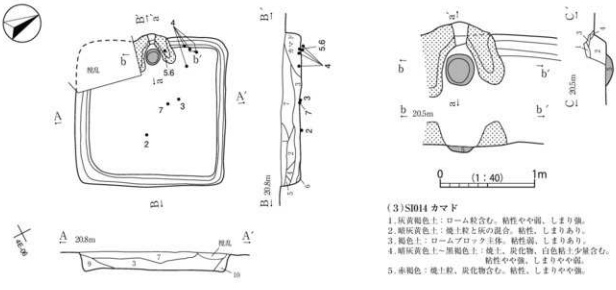
覆土　ローム粒やロームブロックを含む黒色から黒褐色土を主体とする。焼土及び炭化材が全体的に混入していた。

施設等　周溝とカマドが検出された。柱穴などは検出されなかった。周溝は全周すると考えられる。周溝は幅12～16cm、床面からの深さ８cmである。北西壁のカマドは、袖部が両袖ともに遺存する。カマド煙道部の張り出しは小さい。火床部には、焼土が厚く堆積していた。

遺物出土状況　カマド周辺の覆土中からまとまって出土している。

出土遺物　図示できた遺物は、土師器坏５点、土製支脚１点である。１・２は土師器坏でいずれも破片である。１の推定口径は11.1cm、２が推定口径9.9cmである。底部外面は手持ちヘラケズリである。３～５は土師器甕である。３の推定口径は22.8cmである。胴部は外面ヘラケズリ、内面はナデ調整である。４はほぼ完形の小型甕である。口径17.4cm、口縁部ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ、内面はナデ調整である。５は下半部が残っている。小型だが長胴の甕である。胴部外面ヘラケズリ、内面はヘラナデ、器厚は薄い。底部に木葉痕が残る。６は土製支脚である。ほぼ完形である。５・６はカマド内から出土している。

出土遺物から、本竪穴は７世紀中葉～後半と考えられる。

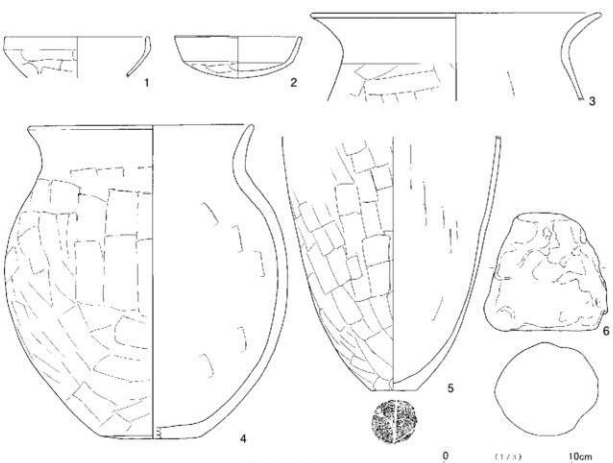


(3)SI014 カマド

1.灰黄褐色土：ローム粒含む。粘性やや弱、しまり強。
2.暗灰黄色土：焼土粒と灰の混合。粘性、しまりあり。
3.褐色土：ロームブロック主体。粘性弱、しまりあり。
4.暗灰黄色土～黒褐色土：焼土、炭化物、白色粘土少量含む。粘性やや強。しまりやや弱。
5.赤褐色：焼土粒、炭化物含む。粘性、しまりやや強。

(3)SI014

1.灰黄褐色土：ローム粒含む。粘性やや弱、しまり強。
2.黒色～黒褐色土：ローム粒少量含む。粘性、しまり強。
3.黒色土：焼土粒、炭化物、ローム粒含む。粘性、しまりやや強。
4.黒褐色土：焼土粒少量含む。粘性、しまりやや強。
5.黒褐色土：ローム粒含む。焼土粒少量含む。粘性、しまりやや強。
6.黒色土：ロームブロック、ローム粒含む。炭化物少量含む。粘性、しまりやや強。
7.黒色土：ロームブロック少量含む。粘性あり、しまり弱。
8.灰オリーブ：白色粘土と暗褐色土の混合。焼土粒、炭化物含む。粘性あり、しまり強。カマド袖。
9.黒褐色土：焼土粒少量含む。粘性、しまりやや強。
10.黒褐色土：ロームブロック、ローム粒含む。焼土粒少量含む。粘性、しまりやや強。



第27図　(3) SI014

(3) S I 0 1 6（第28図、図版5・15）

位置・形態　4F-38グリッドを主体に検出された。近・現代の撹乱により大きく削平され、遺存するのは北西のコーナー部分のみである。規模は不明であるが、遺存箇所から平面の形態は方形と考えられる。カマドは遺存しないが、北西壁側に焼土やカマド構築材の白色粘土が散布しており、北西壁に設置されていたと考えられる。検出面から床面までの深さは、北東壁20cm、北西壁20cmである。

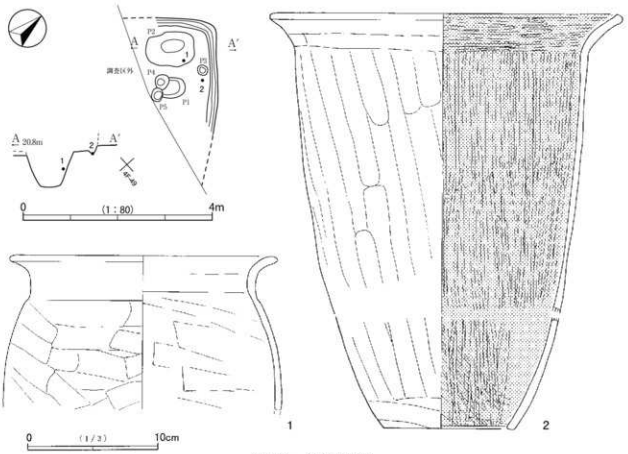
覆土　撹乱によりほぼ覆土が失われており、覆土の堆積状況は不明である。

施設等　ピット4基と周溝、貯蔵穴が検出された。P1は主柱穴と考えられる。直径48cm、床面からの深さ27cmである。その他ピットでは、床面からの深さはP3が35cm、P4が38cm、P5が42cmである。周溝は全周すると考えられる。周溝は幅12cm、床面からの深さ9cmである。貯蔵穴と考えられるP2は、長軸方向104cm、短軸方向75cmの隅丸長方形で、床面からの深さ72cmの深いものである。

遺物出土状況　出土量は微量である。土師器甕が貯蔵穴内とその周辺から出土している。

出土遺物　図示できた遺物は、土師器の甕と甑である。1は推定口径20.4cmの甕で、口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ調整である。2は甑であろう。口径26.7cm、口縁部ヨコナデ、外面胴部ヘラケズリ、内面は赤彩されミガキが施されている。甑内面の口縁から胴部全面にミガキ調整が施され赤彩される例は極めて珍しい。甑であることから直接熱を受ける土器ではない点を考慮すると、外面にも赤彩されていれば、何らかの痕跡が残ると思われるが、一切赤彩の痕跡は認められない。このことから、目的的に製作当初から内面にのみ赤彩を施し、丁寧なミガキを施していると考えられる。

出土した甕から、本竪穴の時期は6世紀後葉～7世紀前葉と考えられる。



第28図　(3) SI016

第５章　奈良・平安時代の遺構と遺物

第１節　概要

竪穴建物跡１棟、掘立柱建物跡６棟、柱穴列２基、版築遺構１基、溝５条、土坑３基が検出されている。いずれも近・現代の撹乱の影響を受けており、遺構の損壊状況は顕著である。

注目されるのは、掘立柱建物跡、溝、版築遺構などの遺構群とその位置関係である。検出された６棟の掘立柱建物跡のうち２棟が側柱建物跡、残る４棟は総柱建物跡で、このうち２棟は千葉県内では類例の少ない布掘りの掘立柱建物跡である。各柱穴の覆土内から時期を特定できる遺物は出土しておらず時期は不明であるが、唯一、布掘りの掘立柱建物跡の（２）SB002と竪穴建物跡の（２）SI003が重複しており、時期的な点について検討することができる。

また、第192-3地点の調査区東側で検出された溝（３）SD004は南北に延びる規模の大きな溝で、検出された掘立柱建物跡群が、この溝より西側に位置している点で注目される。覆土内からは８世紀代を中心とした土器が出土している。（３）SD004のさらに東側から、やや東に振れる溝（３）SD007が検出されている。溝の上層からは９世紀前葉～中葉の土器とともに瓦塼類が出土しており、２条の溝は官衙域を区画する溝とみられることから重要である。版築遺構が、第192-3地点の調査区西側で検出されている。千葉県内では類例が限られている。残念ながら近・現代の撹乱が顕著な区域であることから、建物規模などは正確にはつかめていないが、時期的には、周辺から検出されている掘立柱建物跡群や大溝の（３）SD004・（３）SD007などの遺構群と同時期と推測される。

第２節　竪穴建物跡

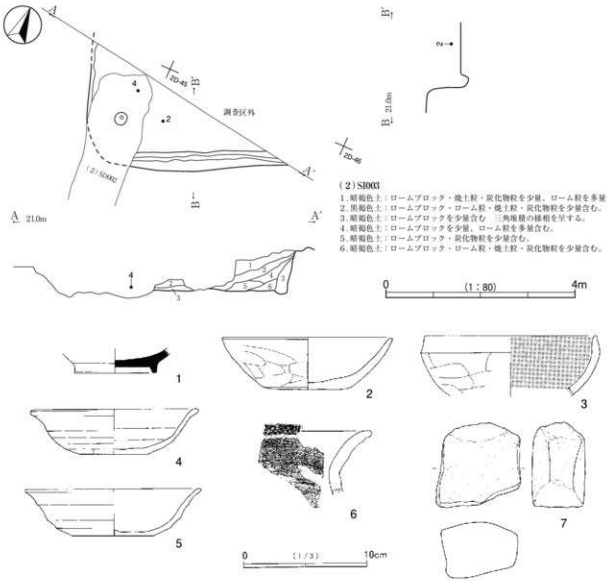
（２）ＳＩ００３（第29図、図版３・13・14・18）

位置・形態　2D-45グリッドを主体に検出された。検出されたのは竪穴の南西コーナーの一部で、竪穴本体は調査区外となっている。布掘り掘立柱建物跡の（２）SB002と重複している。調査時には（２）SB002を１条の溝と判断しており、その溝が本竪穴を壊していると推測していた。本竪穴の床面が（２）SB002の覆土部分では黒色を呈していたことも、本竪穴との新旧関係をわかりにくくさせていた。しかし、整理作業で第29図の４土師器坏が本竪穴の床面相当から正位の状態で出土していることを確認できたことから、完形の坏類が布掘り掘立柱建物跡の柱掘方から出土する可能性は低いと判断し、本竪穴の方が（２）SB002よりも新しいと判断した。撹乱が顕著なため、竪穴の平面形態や規模については、詳細は不明だが方形を呈し、カマドは北東壁に位置していると推測される。検出面から床面までの深さは23cmである。

覆土　暗褐色土を主体とする。焼土及び炭化材が全体的に混入している。

施設等　周溝が検出された。（２）SB002の底面で検出されたピットは、本竪穴のものではないと考えられる。

遺物出土状況　出土量は微量である。竪穴の殆どが撹乱により失われていることや辛うじて残った覆土内にも撹乱が認められており、時期の異なる遺物が混入していることは明らかである。第29図の４・５は、本竪穴の下の（２）SB002の覆土の遺物として取り上げられており、遺構の時期を検討するうえで注意が必要である。



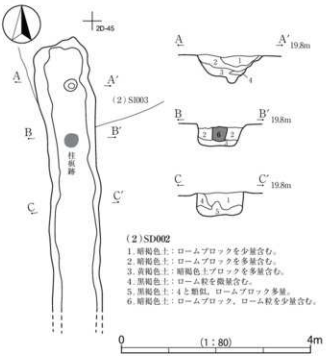
第29図　(2)SI003

出土遺物　図示できた遺物は、須恵器１点、土師器５点、砥石１点である。１は須恵器高台付坏の底部である。９世紀前半と思われる。２～５は土師器坏である。２は推定口径13.5㎝である。外面手持ちヘラケズリである。９世紀前半と思われる。３は口縁部の破片である。推定口径14.1㎝で、外面手持ちヘラケズリ、内面黒色処理されている。８世紀前半と思われ、他の土器と時期がかなり異なっていることから、撹乱による混入であろう。４はロクロ土師器である。完形で口径13.5㎝である。底部回転ヘラ削り調整である。９世紀後半と思われる。前述したように、(2)SB002の覆土から出土した遺物として取り上げられていたが、本竪穴の床面相当のレベルから出土していることが確認できたことから、本竪穴の遺物と判断した。５は土師器甕の口縁部片である。この土器も(2)SB002の覆土から一括で取り上げられていたものだが、４と成形技法が同じで、同時期と判断される。６は土師器甕の口縁部である。７は砂岩の砥石である。被熱により変色している。本竪穴の撹乱状況は顕著であり、時期の異なる土器が混在しており、判断は難しいが、４の土師器坏から、本竪穴は９世紀後半と考えられる。

第３節　掘立柱建物跡

（2）ＳＢ００２（第30図、図版13）

位置・規模　2D-44・54グリッドで検出された布掘りの掘立柱建物跡と考えられる。遺構周囲は近・現代の撹乱によって複雑に削平されている。調査時点では、本遺構は１条の溝と判断され、竪穴の（2）SI003を壊しているとの判断で調査が進められた。本遺構の覆土と判断した範囲から第29図４の坏が出土している。この坏は（2）SI003の床面直上に相当していることが、整理の結果確認できたことから、本遺構の廃絶後に竪穴が構築されたと判断した。本遺構の主軸方位は、ほぼ座標北方向を示している。第30図の断面図に示したように柱痕跡を確認していたことから、第192-3地点で検出された掘立柱建物跡の（3）SB004と同規模の布掘りの柱掘方を持つ掘立柱建物跡であろうと推測される。撹乱が激しいため、規模の詳細を把握できないが、検出された部分は、ほぼ全形を検出した（3）SB004（第31図）の北東側の１条の位置に相当すると考えられ、西側に同規模の布掘りが展開すると推測される。布掘りの残存長は5.2m、幅1.0m、（3）検出面からの深さ0.5mである。我孫子市日秀西遺跡で検出された正倉と推定される柱掘方を伴う掘立柱建物跡群と同様の建物跡と考えられる。



第30図　（2）SB002

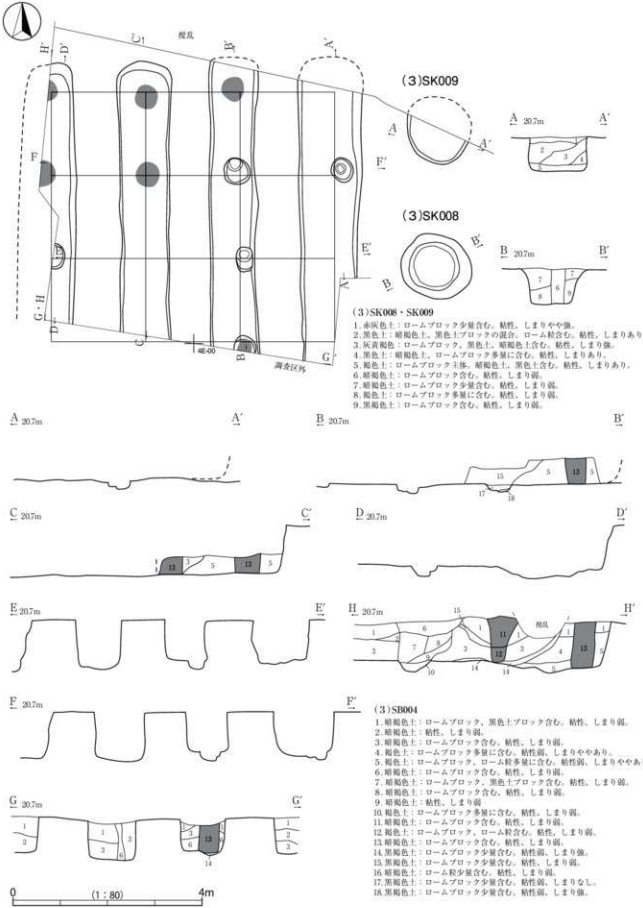
柱穴覆土　柱穴の覆土は、ロームブロックを含む暗褐色土を主体とする。

遺物出土状況　土師器坏の破片が、覆土内から取り上げられているが、撹乱の激しさから竪穴建物跡の（2）SI003 に伴う遺物と判断し、第29図５として掲載している。

本遺構の時期は、（2）SI003の竪穴建物跡の方が新しいと判断されることから、竪穴の構築以前の９世紀半ばまでには廃絶した遺構であると推測される。

（3）ＳＢ００４及び（3）ＳＫ００８・（3）ＳＫ００９（第31図、図版７・８）

位置・規模　3D-99 ～ 3E-91グリッドを主体に検出された。（3）SB004は南北に延びる４条の布掘り柱掘方を持つ掘立柱建物跡である。調査時は近・現代の撹乱と推測していたが、覆土の上層を除去した段階で、覆土内で柱痕跡が確認され、また覆土を掘りきった基底面においても柱のあたりを検出したことから、布掘りの掘立柱建物跡であることが判明した。４条の溝が並行しており、南側は調査区内の法面に入り込んでいたため、完掘はできなかった。主軸方位は座標北で、東西３間以上、南北３間以上の総柱建物跡で、柱掘方は幅1.2m、検出面からの深さ0.8 ～ 0.9mである。本来の立川ローム層最上層まで残存していれば、深さは、優に１mを越えていると推測される。基底面には柱痕跡が明瞭に残る箇所もある。我孫子市日秀西遺跡で検出された正倉と想定される布掘りを伴う掘立柱建物跡群と同様の建物跡と考えられる。検出された布掘り４条が建物跡の全てであれば、梁行３間、検出できた限りでは桁行３間だが、４間だった可能性もある。柱間寸法は2.0mである。注目されるのは、この掘立柱建物跡の東側に隣接して２基の土坑が検出



第31図　(3)SB004及び(3)SK008・(3)SK009

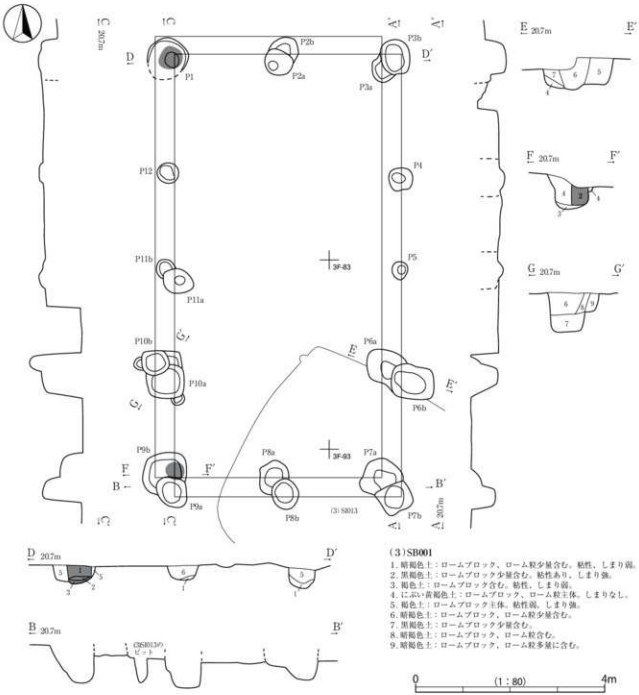
されていることである。(3)SK008・(3)SK009は、直径1.4mのほぼ同規模の円形土坑で、検出面からの深さもほぼ同じ0.7mである。(3)SB004の東端から0.9m離れており、2基の土坑の距離は芯々で2.8m離れている。柱痕跡が(3)SK008で確認できることから、(3)SB004とは一連の壺掘り柱掘方、もしくは掘立柱建物施設に付属する出入口施設などの可能性が考えられる。

覆土　ロームブロック、ローム粒を多く含む褐色～暗褐色土を呈している。

遺物出土状況　遺構覆土から時期を特定できる遺物は出土していない。

(3) ＳＢ００１（第32図、図版５・６）

位置・規模　3F-72・82グリッドを主体として検出された。調査工程の都合から北側と南側約半分ずつが



第32図　(3)SB001

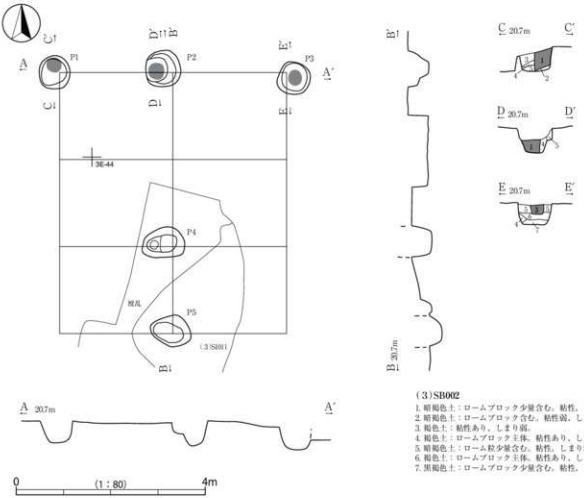
時期を違えて調査しており、遺構全体を一度に調査できていない。撹乱による影響で検出面が低いため、南側の約半分の検出面の水準が低くなっている。また、弥生時代の竪穴建物跡（３）SI013と重複しており、言うまでもないが本遺構の方が新しい。P7・P8は弥生時代の竪穴の範囲に位置しており、柱穴が竪穴の床面を壊している。本遺構の長軸の方位は座標北で、東西２間、南北４間の側柱建物跡と推測される。桁行9.2m、梁行4.8mである。P2・P3・P6・P7・P8・P9・P10・P11はａ・ｂ２つのピットからなり、ほぼ同位置で１度建て替えが行われていると考えられる。柱穴は直径0.6m～1.0mで平面の形態はやや企画性に乏しく、円形や長方形などからなっている。各柱穴の深さは概ね一定している。P1とP9bでは柱痕跡が確認できた。

柱穴覆土　柱掘方の覆土は、ロームブロック、ローム粒を含む暗褐色～褐色土である。明瞭な柱の抜き取り痕は確認できない。

遺物出土状況　遺構覆土からは遺物の出土はなかった。

（３）ＳＢ００２（第33図、図版６）

位置・規模　3E-34・44グリッドを主体に検出された。遺構全域が近・現代の撹乱により削平され５基の柱穴が遺存するのみで、図示できなかった柱穴は、撹乱によって失われていると考えられる。主軸方位は座標北で東西２間、南北３間の総柱建物跡と推測され、桁行5.6m、梁行5.0mである。柱掘方は直径0.8m～1.0m、検出面からの深さ0.5mの円形ないしは楕円形を呈する。



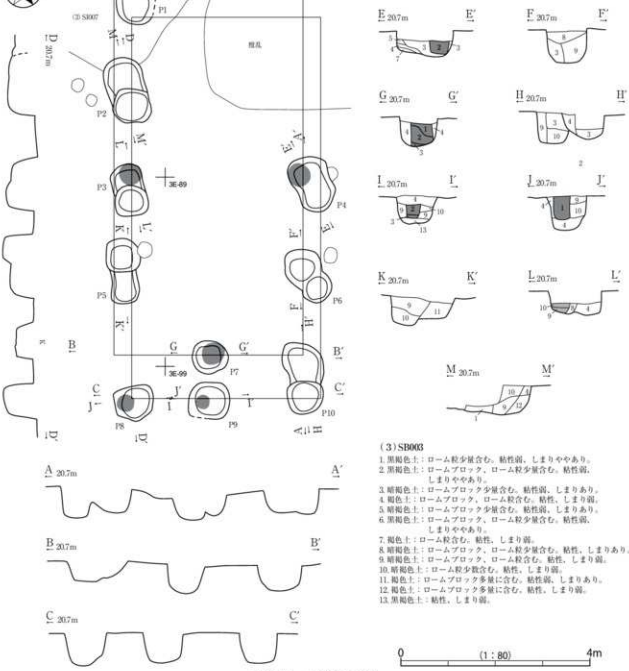
第33図　（３）SB002

柱穴覆土　柱穴の覆土は、ロームブロックを含む褐色～暗褐色土である。

遺物出土状況　遺構覆土から遺物は出土していない。

（3）ＳＢ００３（第34図、図版６）

位置・規模　3E-79・89グリッドを主体に検出された。主軸方位が座標北、東西２間、南北４間の側柱建物跡である。撹乱が顕著なため、約半分の柱穴が失われている。桁行8.0m、梁行3.6mで、柱掘方は一辺0.8m～1.0m、検出面からの深さ0.6 ～ 0.8mの隅丸方形である。柱掘方の形状からほぼ同位置での建て替えが行われたと考えられる。P1は、古墳時代後期の（3）SI007の床面を壊している。桁行5.6m、P3・P4・P7 ～ P9



第34図　（3）SB003

では柱痕跡を確認できた。

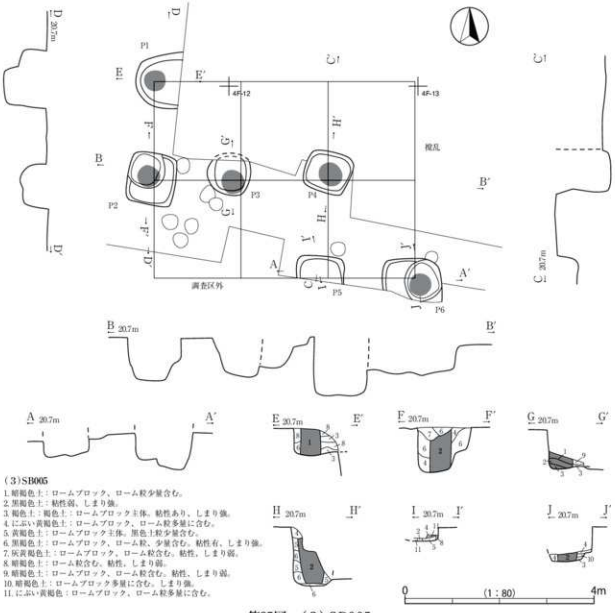
柱穴覆土　柱穴の覆土は、ロームブロックを含む褐色～暗褐色土である。

遺物出土状況　遺構覆土から遺物は出土していない。

(3) ＳＢ００５（第35図、図版８）

位置・規模　4F-12グリッドを主体に検出された。主軸方位は座標北で、確認された範囲では南北２間、東西３間の桁行5.6m、梁行4.2mでの総柱建物跡であるが、柱掘方の形態や規模からすれば、南北３間、東西４間の規模である可能性がある。柱掘方は一辺0.8m～1.2mの方形で、検出面からの深さはP4の1.2mを除いて0.6m～0.8mである。柱間寸法は2.0mである。検出した柱穴のうち、P5以外では柱痕跡が確認されているが、抜き取りの痕跡を認めることはできない。

柱穴覆土　柱穴の覆土はローム主体の黄褐色～褐色土と、ロームの少ない黒褐色～暗褐色土からなる。版築層と言えるような覆土である。



第35図　(3) SB005

遺物出土状況　遺構覆土から遺物は出土していない。

(3)ＳＡ００１（第36図、図版９）

位置・規模　3F-63グリッドを主体に検出された。主軸方位がN-3°-W、南北にほぼ一直線に並ぶ４基のピット列である。直径20cm～28cmのピットが、1.6mの間隔で並ぶ。ピットの検出面からの深さは、それぞれP1が40cm、P2が25cm、P3が40cm、P4が24cmである。

大溝（3）SD004に平行している点から、何らかの関連性のある遺構ではないかと推測される。

柱穴覆土　覆土は、ロームブロック、ローム粒を含む黒褐色土～暗褐色土を主体とする。

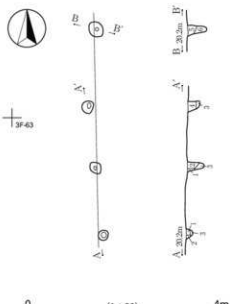
遺物出土状況　遺構覆土から遺物は出土していない。

(3)ＳＸ００２（第40図・図版９）

位置・規模　3F-54グリッドで検出された。２基並んだ柱穴列である。大溝の（3）SD004の途切れた部分の西側に位置しており、大溝のいわば橋の部分に設けられた木戸のような施設の存在を示唆している。大溝からは約3.0m離れ南北方向に並んでいる。柱掘方は１辺1.2m、深さ0.5mの円形である。柱間は芯々で2.0mである。

柱穴覆土　柱穴の覆土は、ロームブロックとローム粒を多量に含む黒褐色～暗褐色土を主体とする。

遺物出土状況　遺構覆土から遺物は出土していない。



(3)SA001
1.暗褐色土：ロームブロック、ローム粒多量に含む。しまり強。
2.暗褐色土：ローム粒多量に含む。
3.褐色土：ローム粒と黒色土粒の混合土。しまり強。
4.黒褐色土：ロームブロック、ローム粒含む。しまりあり。
5.黒褐色土：ロームブロック含む。炭化物少量含む。粘性弱、しまりなし。
6.暗褐色土：ロームブロック含む。粘性弱、しまりなし。

第36図　(3)SA001

第４節　版築遺構

(3) ＳＸ００１（第37図、図版９～11）

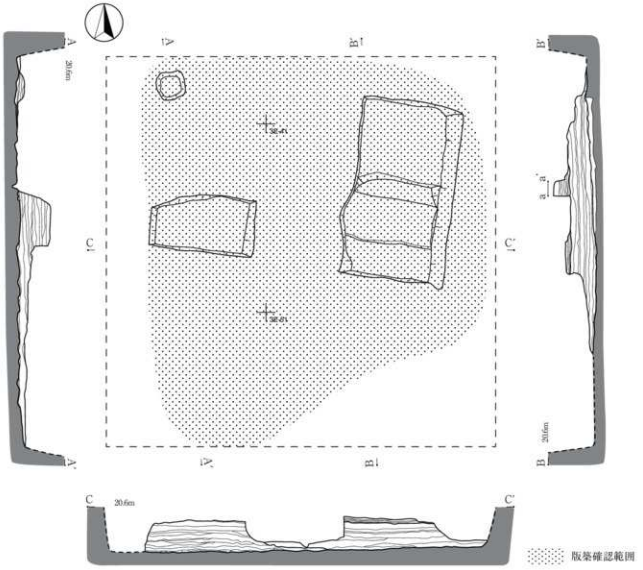
検出状況　第192-3地点のトレンチによる遺構確認作業を行ったところ、版築状の土層の堆積が確認された。周辺は旧陸軍関連建物基礎も確認され、大きく損壊を受けている可能性が高い地点であることが予想された。そのため、その規模と版築層の状況を確認するために、近・現代のコンクリート基礎による撹乱部分を丁寧に除去しながら、遺構の遺存部分を検出した。精査の結果、大きく損壊しているものの、第37図に示したような版築遺構を確認することができた。この版築遺構は、古代の土木技術の一つで、建物を築造する際にその基礎となる地面を掘り下げた後、土質の異なる土を交互に搗き固める積土工法によるもので、内部を埋め戻した掘込地業の痕跡であると考えられる。残念ながらかなりの部分が版築の基底面まで撹乱が及んでいたため、地業の規模を把握することはかなり困難な状況であった。そのため、版築の遺存範囲を記録した後、東西、南北方向に版築層の状況を確認するための３本のセクションベルトを設定し、改めて版築の土層断面図を作成することにした。

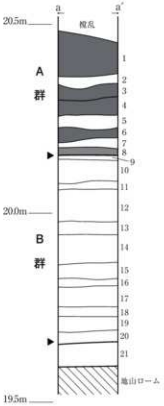
位置・形態　3E-40・41グリッドを主体に検出された。版築層は基底面から最大で約80㎝の高さが遺存していた。本来地山層となっているはずの立川ローム層が、軍施設の建設によりほとんど失われており、掘込地業による竪穴状の掘り込みを確認することはできなかったが、第37図のトーンで示した平面範囲には版築層が残っていた。改めて、掘込地業の範囲を推定してみると、A-A′とB-B′の北側で確認された版築層の末端がほぼ同じラインを示しており、C-C′の東側で掘り込みの壁が残っている可能性がある。このことから、正方形の掘り込みを想定すると、掘込地業の基底面の範囲は、第37図に示した点線範囲の一辺約7.6ｍ四方の規模と推定される。あくまで掘込地業の規模であることから、地上の基壇はこの規模を上回る可能性があるだろう。最初に行われた掘込地業範囲の基底面には、若干の凹凸が認められ、搗き固めの痕跡と考えられた。なお、版築層の上位面には、礎石据付穴や柱穴などの痕跡は検出されなかった。

版築層の状況　本遺構の調査後、掘込地業が行われた部分には弥生時代の竪穴建物跡が位置していることが判明したことから、地業は弥生時代の竪穴を壊し、この竪穴の床面にかなり近い深さまで掘り下げていることが確認された。第37図のセクション図に示した地山のトーンは、掘り込みの深さを示したもので、トーンの最上部は、周辺で辛うじて残存した立川ローム層最上面（Ⅲ層上面）の標高20.6ｍを参考に示している。基底面の標高が19.75ｍであったことから、少なくとも地山ローム面から約85㎝の掘り込みが行われたと推定される。一方、版築層は、基底面から約80㎝までが一部で残っていた。版築層中には礫などは全く含まれておらず、見た目にはロームないしは周辺土壌によって版築土が賄われていると考えられる。基底面から上約50㎝までは、ロームとロームブロックを主体とする層とロームと褐色土が混在する層の互層、約50㎝から上では、ロームと褐色土が混ざる土層とロームを少量しか含まない黒褐色の土層の互層からなっており、明らかに50㎝を境に上下で土質・土色が異なっている。掘込地業部分と基壇部分では土の色調や質が異なっていることが多いとされており、版築層の上部には基壇を構成した版築層が残っているとともに、掘込地業厚が約50㎝であったことが推定できる。土壌分析を行っていないため明言できないが、転写した土層の顕微鏡観察では、粒度の細かい砂が本来の立川ロームなどで観察されるよりも多く認められるようであることから、掘込地業部分の版築土には砂が混ぜ込まれている可能性がある。

なお、千葉県内の類例が限られる版築遺構であることから、版築層の３か所でウレタン系樹脂（トマックNS-10）を使用した土層転写を実施している。

出土遺物　覆土内から土師器、須恵器小片が微量に出土したが、時期を特定できるものは皆無であった。





(3)SX001

1.黒褐色土：ローム微量混在　上部撹乱により一部軟化
2.暗褐色土：ローム・φ約1cm以下のハードロームブロック少量混在　硬質
3.黒褐色土：ローム微量まだらに混在　硬質
4.黒褐色土：φ約1cm以下のハードロームブロックが微量まだらに混在　硬質
5.暗黄褐色ブ：ローム・φ約1cm以下のハードロームブロック主体
黒褐色土が層状に挟まれる　硬質
6.黒褐色土：ローム微量混在　硬質
7.灰褐色ブ：ローム・φ約2cm以下のハードロームブロック主体　硬質
8.黒褐色土：ローム微量混在　硬質
9.灰褐色ブ：φ約2cm以下のハードロームブロック主体　硬質
10.暗褐色土：ローム主体　φ約3cm以下の暗色ハードロームブロック混在
硬質
11.灰褐色ブ：φ約1cm以下のハードロームブロック主体　硬質
12.暗橙色土：ローム主体　φ約2cm以下の暗色ハードロームブロック少量混在
硬質
13.灰褐色ブ：φ約1cm以下のハードロームブロック主体　硬質
14.暗褐色：暗色ローム主体　硬質
15.暗黄褐色ブ：暗色ローム主体　φ約2cm以下のロームブロック多量に混在
硬質
16.灰褐色ブ：φ約2cm以下の暗色ハードロームブロック主体　硬質
17.暗褐色土：ローム主体　φ約2cm以下の暗色ハードロームブロックが少量混在
硬質
18.灰褐色ブ：φ約2cm以下のロームブロック主体　硬質
19.暗褐色土：ローム主体　硬質
20.灰褐色ブ：φ約2cm以下のロームブロック主体　硬質
21.黒褐色土：弥生時代竪穴建物跡(SS3001)の覆土

0　(1：10)　0.5m

第37図　(3)SX001

第５節　溝状遺構

(2) ＳＤ００１（第38図）

位置・規模　2C-58～2D-51グリッドにかけて東西約８ｍにわたって検出された。主軸方位はＮ-87°-Ｗで東西方向に直線的に延びている。溝幅は約0.8m、検出面から底面までの深さは約0.2mと浅い。

覆土　近・現代の撹乱により覆土は大きく削平されている。ロームブロック、ローム粒を微量に含む黒褐色～暗褐色土を主体としている。

遺物出土状況　出土量は微量である。

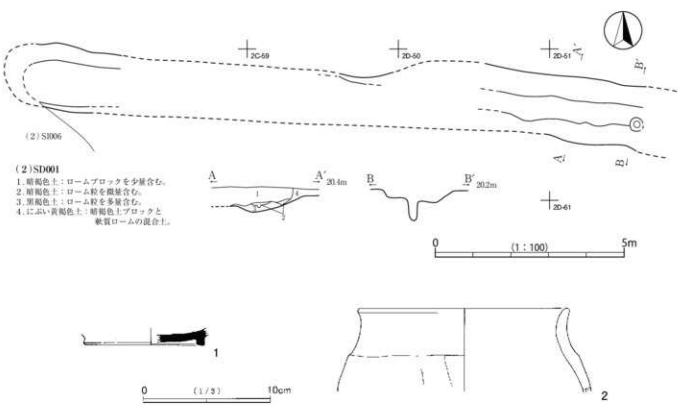
出土遺物　図示できた出土遺物は、須恵器坏１点、土師器甕１点である。１は須恵器高台付坏底部である。２は、土師器甕口縁部～胴部である。口径15.5cmである。外面胴部ヘラケズリである。

遺物の出土量は微量であり、時期の特定できる遺物にも乏しい。周辺は近・現代の撹乱が激しく、図示した遺物について溝に伴う遺物の可能性は低く、溝の時期は不明である。

(3) ＳＤ００１（第39図、図版12）

位置・規模　第192-3地点の北側3E-59グリッドを主体に検出され、南北方向に延びる溝である。東側約３ｍ離れて、(3) SD002が位置している。溝幅約0.8m、検出面から底面までの深さは約0.2mと浅い。(3) SD002と並行しているようだが、道路状遺構に伴うものか不明である。調査区の南側で検出された溝の(3) SD005や(3) SD006とつながる可能性がある。

覆土　覆土は、ローム粒の混じる暗褐色土を主体としている。



第38図　(2) SD001

遺物出土状況　遺物は全て一括で取り上げたため、遺物の出土状況は不明である。遺物はいずれも土師器、須恵器の小片であり、時期の特定できる遺物は出土していない。

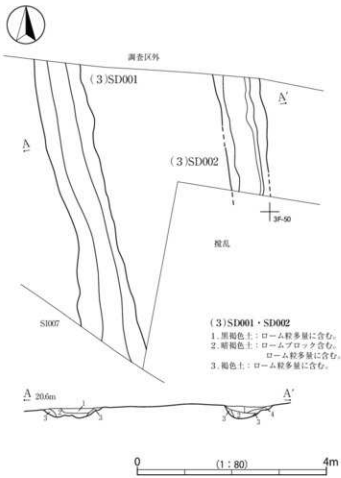
出土遺物　時期を特定できる遺物は出土していない。

(3)ＳＤ００２（第39図、図版12）

位置・規模　第192-3地点の北側3E-49グリッドを主体に位置している。西側に(3)SD001が約３m離れて位置している。南北方向に延びており、溝幅は約1.0m、検出面から底面までの深さは約0.2mと浅い。(3)SD001と並行しているようだが、道路状遺構に伴うものか不明である。調査区の南側で検出された溝の(3)SD005や(3)SD006とつながる可能性がある。

覆土　覆土は、ローム粒の混じる暗褐色土を主体としている。

出土遺物　時期を特定できる遺物は出土していない。



第39図　(3)SD001・(3)SD002

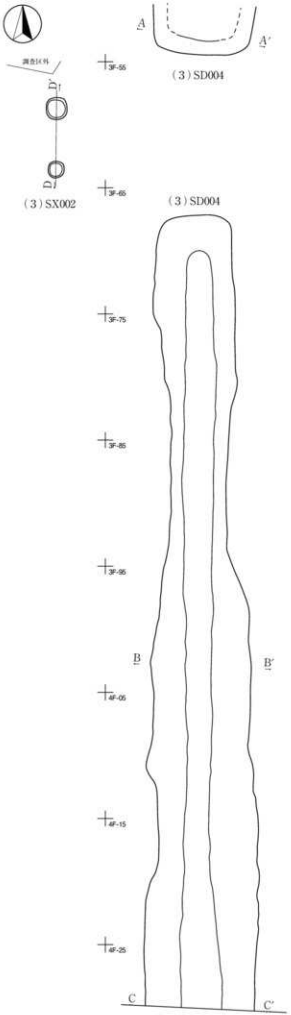
(3)ＳＤ００４（第40・41図、図版12・15・18）

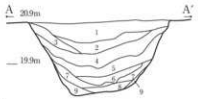
位置・規模　3F-45～4F-25グリッドにかけて検出された規模の大きな溝である。総延長距離は約32mで、座標北を向いている。調査区北側で約５m途切れている。溝幅は最大約3.6m、検出面から底面までの深さは約2.0m、断面形態は逆台形を呈する。底面は、ほぼ平らで、幅は0.8m～1.2mである。梯子がない限り下からは地上にあがれないほどの深さで、法面も急で、法面に足掛け穴などのピットは検出されておらず、滑らかな法面を呈している。注目されるのは、北側の途切れた部分である。溝を渡るための通路、すなわち土橋と考えられ、さらにその西側には、南北に並ぶ２基の柱穴列(3)SX002が位置しており、木戸のような何らかの施設があった可能性が高い。(3)SX002の土坑は円形を呈し、南側の土坑には柱痕跡が確認されている。

本溝の東側約20m離れて(3)SD007の溝が検出されている。この溝の方向は、やや座標北よりも東に振れており、平行していない点は重要であろう。

覆土　覆土は、ロームを多量に含む暗褐色土とロームが微量に含む黒褐色土が交互に堆積し、人為的に埋め戻された可能性は低いのではないかと思われる。

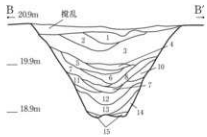
遺物出土状況　出土遺物は溝が深いにもかかわらず、覆土内から少量出土しただけである。　出土遺物のうち、須恵器７点、土製品１点を図示した。１・２は須恵器蓋である。１は蓋口縁部での破片で、推定口径12.0cmである。２は蓋天井部である。つまみと口縁端部を欠損する。天井部外面を回転ヘラケズリ調整





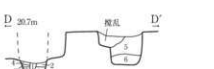
(3)SD004 A-A′

1.明褐色土：粗砂、ローム粒、黒色土ブロック含む。粘性、しまりあり。
2.明褐色土：黒色土、含む。粗砂、ローム粒少量含む。しまりやや弱、粘性やや強。
3.明褐色～黒褐色土：粗砂、黒色土、明褐色土含む。粘性あり、しまりやや弱。
4.明褐色～黒褐色土：粗砂、黒色土、明褐色土含む。ロームブロック少量含む。粘性あり、しまりやや弱。
5.褐色土：ローム粒多量に含む。黒色土ブロック、ロームブロック含む。粘性あり、しまりやや弱。
6.黄褐色土：ロームブロックとローム粒主体。明褐色土含む。粘性あり、しまりやや弱。
7.黒褐色土：黒褐色土主体。ロームブロック少量含む。粘性やや強、しまり弱。
8.黄褐色土：ロームブロックとローム粒主体。明褐色土含む。粘性あり、しまりやや弱。
9.黒褐色土：黒褐色土主体。ロームブロック少量含む。粘性やや強、しまり弱。



(3)SD004 B-B′

1.黒褐色土：明褐色、黒褐色土含む。粘性弱、しまりやや強。
2.にぶい黄褐色土：ロームブロック、ローム粒多量に含む。粘性弱、しまりやや強。
3.黒褐色土：ローム粒含む。粘性、しまりやや強。
4.黒褐色土：粗砂多量に含む、ローム粒少量含む。
5.灰黄褐色土：ロームブロック、ローム粒含む。
6.黒褐色土：粗砂、明褐色土の互層。ロームブロック含む。炭土、炭化物少量含む。
7.黒褐色土：ロームブロック、黒色土ブロック含む。しまり弱。
8.黒褐色土：黒色土ブロック含む。ロームブロック少量含む。しまり弱。
9.明褐色土：細砂、中砂層。砂粒中にローム粒混じる。粘性、しまり弱。
10.黒褐色土：ロームブロック含む。しまり弱。
11.にぶい赤褐色土：ローム粒主体。粘性、しまり弱。
12.黒褐色土：ロームブロック、粗砂、黒色土の互層。しまり弱。
13.にぶい赤褐色土：ロームブロック主体。粘性、しまり弱。
14.黒褐色土：ロームブロック、粗砂、黒色土含む。しまり弱。
15.黒褐色土：黒色土主体。ロームブロック含む。



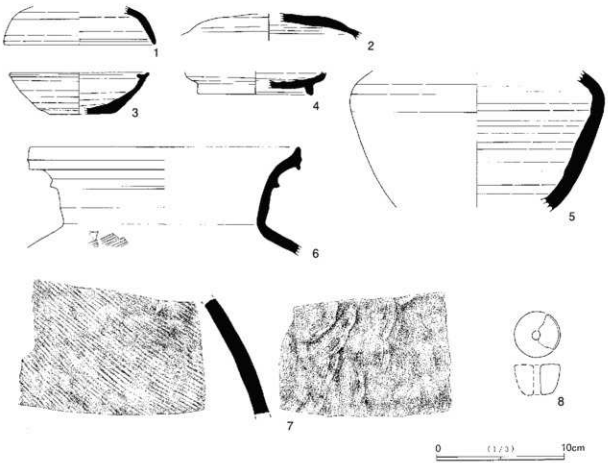
(3)SX002 D-D′

1.黒褐色土：ロームブロック、ローム粒多量に含む。
2.明褐色土：ロームブロック、黒色土多量、ローム粒少量含む。
3.褐色土：ロームブロック、ローム粒主体。明褐色土、黒色土含む。
4.褐色土：ロームブロック、ローム粒主体。明褐色土、黒色土含む。
5.黒褐色土：ロームブロック、ローム粒多量に含む。黒色土含む。
6.明褐色土：ロームブロック、ローム粒多量に含む。

0 (1：80) 4m

0 (1：120) 4m

第40図　(3)SD004・(3)SX002



第41図　(3) SD004出土遺物

する。3・4は須恵器坏である。3は破片だが全体形を復元できる破片で、受け部があり、推定口径9.6cmである。底部はヘラケズリである。4は高台付坏の底部である。高台は約半分が残存し、推定底径は9.3cmである。底部は回転ヘラケズリ調整である。5は須恵器小型壺の胴部破片である。内外面を回転ナデ成形、胴部下半部の外面にヘラケズリ調整が行われている。6・7須恵器甕である。6は大型の甕の口縁部で、推定口径は21.0cmである。胴部の外面はタタキである。7は胴部片である。外面平行タタキ、内面無文当て具痕が残っている。8は、土製の紡錘車である。3分の1が残っている。

出土した土器には7世紀後半～8世紀代まで時期差があるが、溝の時期については、9世紀代初めにはその役目を終えているのではないかと推測される。

(3) SD005（第42図、図版12）

位置・規模　第192-3地点の南側3F-80～4F-10グリッドに位置し、南北方向に延びるが、次第に西側に曲がっていく溝である。約15mにわたって検出された。東側約3m離れて溝の(3)SD006が位置している。溝幅約0.8m、検出面から底面までの深さは約0.2mと浅い。調査区の北側で検出された溝の(3)SD001や(3)SD002とつながる可能性がある。

覆土　覆土は、ローム粒の混じる暗褐色土を主体としている。

遺物出土状況　遺物はいずれも土師器、須恵器の小片であり、時期の特定できる遺物は出土していない。

(3)ＳＤ００６（第42図）

位置・規模　第192-3地点の南側4F-01グリッドを主体に検出された溝である。撹乱により全長約３ｍしか検出されていない。西側約３ｍ離れて溝の（３）SD005が位置している。南北方向に延びていると考えられる。溝幅は約1.0m、検出面から底面までの深さは約0.2mと浅い。調査区の北側で検出された溝の（３）SD001や（３）SD002とつながる可能性がある。

覆土　覆土は、ローム粒の混じる暗褐色土を主体としている。

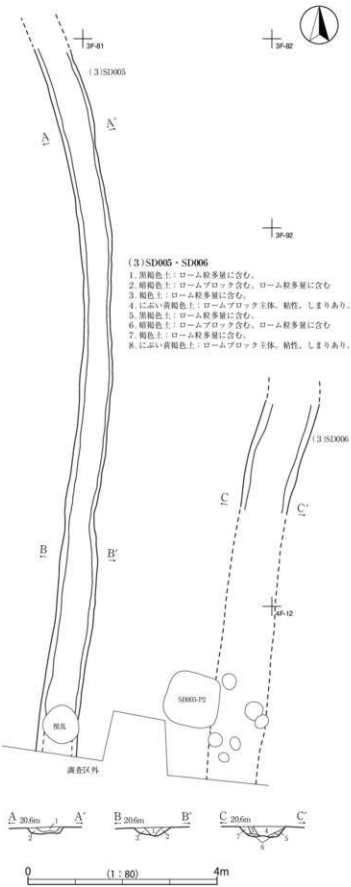
遺物出土状況　遺物は全て一括で取り上げたため、遺物の出土状況は不明である。

出土遺物　時期を特定できる遺物は出土していない。

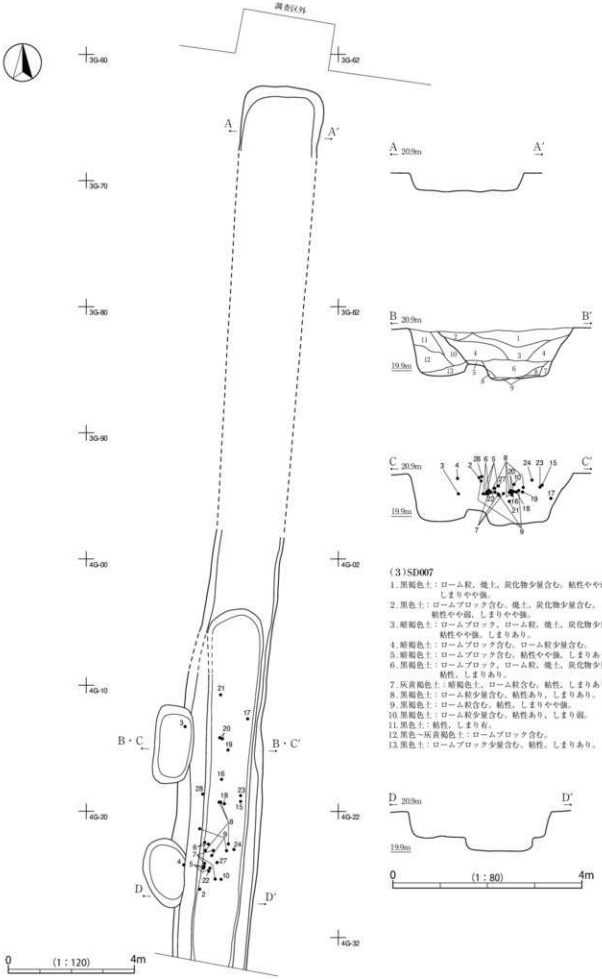
(3)ＳＤ００７（第43～46図、図版12・13・16～18）

位置・規模　3G-61～4G-31グリッドにかけて検出された溝である。総延長距離は約30mであるが、途中大きく撹乱により失われている。溝は南北方向に延びているが、正確にはN-5°-Eの方位をとり、わずかに座標北から東方向にずれている。本溝の西側約20m離れて（３）SD004の大溝が検出されており、この溝の方位は、座標北であることから、平行した位置にない点は重要であろう。

断面形態は逆台形状を呈し、南側では溝の掘り直しが確認されていることから、途中でやや東側にずれて溝全域で掘り直されている可能性が高い。掘り直し前の溝幅は約1.4m、検出面から底面までの深さが約1.0m、掘り直し後で溝幅が約2.6m、検出面から底面までの深さは約0.7mである。最も北側で、溝が途切れているが、（３）SD004と同様に土橋となる可能性がある。本溝の方位と位置から、今回の地点の北方約300m離れた市川市教育委員



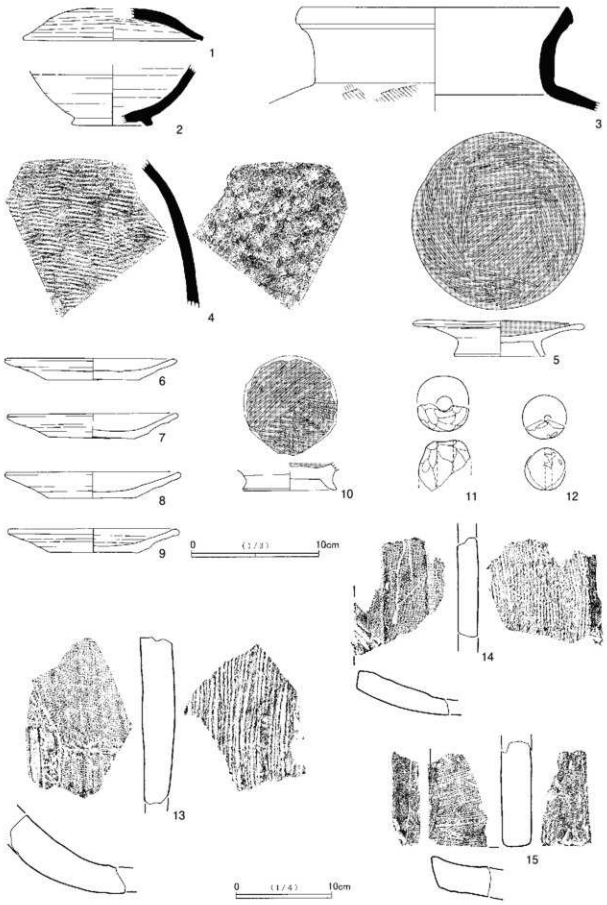
第42図　(3)SD005・(3)SD006



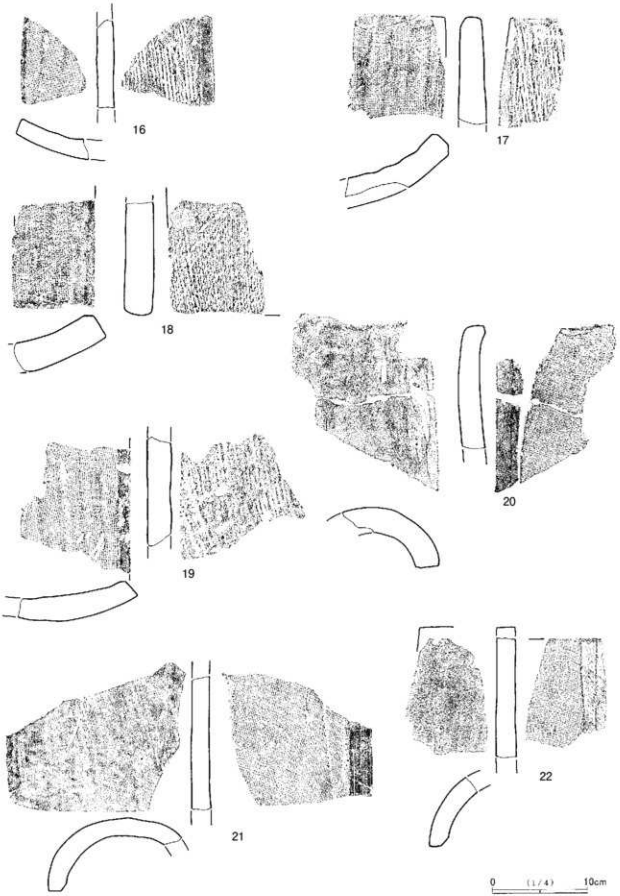
(3)SD007

1.黒褐色土：ローム粒、焼土、炭化物少量含む。粘性やや弱、しまりやや強。
2.黒色土：ロームブロック含む。焼土、炭化物少量含む。粘性やや弱、しまりやや強。
3.暗褐色土：ロームブロック、ローム粒、焼土、炭化物少量含む。粘性やや強、しまりあり。
4.暗褐色土：ロームブロック含む。ローム粒少量含む。
5.暗褐色土：ロームブロック含む。粘性やや強、しまりあり。
6.黒褐色土：ロームブロック、ローム粒、焼土、炭化物少量含む。粘性、しまりあり。
7.灰黄褐色土：暗褐色土、ローム粒含む。粘性、しまりあり。
8.黒褐色土：ローム粒少量含む。粘性あり、しまりあり。
9.黒褐色土：ローム粒含む。粘性、しまりやや強。
10.黒褐色土：ローム粒少量含む。粘性あり、しまり弱。
11.黒色土：粘性、しまり有。
12.黒色～灰黄褐色土：ロームブロック含む。
13.黒色土：ロームブロック少量含む。粘性、しまりあり。

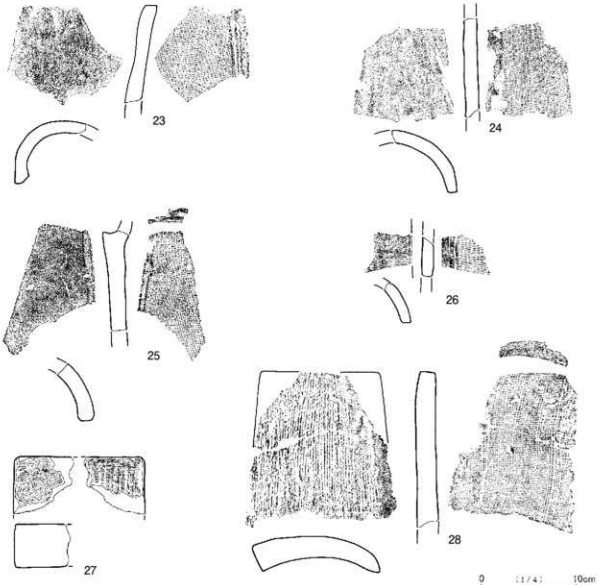
第43図　(3)SD007(1)



第44図 (3) SD007(2)



第45図 (3) SD007(3)



第46図　(3) SD007(4)

会による第4－8地点の調査において検出された溝につながる可能性がある。

覆土　覆土は、新田の溝で大きく分けることができた。古い溝ではロームを少量含む黒褐色土を主体とする。新しい溝では、ロームを含む暗褐色土を主体としている。新しい溝の中段には平らな面(図の6層上面)があることから、新しい溝もある時期に埋め戻され、掘り直されているかもしれない。遺物のほとんどは6層上面以上から出土している。

遺物出土状況　出土遺物は溝の南側の掘り直された新しい溝の覆土中位からまとまって出土している。

出土遺物　土師器、須恵器のほか、瓦塼類が多量に出土している。図示したのは須恵器4点、土師器6点、土製品2点、瓦塼類16点である。瓦塼類は、総点数170点、総重量24,400gで、このうち平瓦は86点(15,740g)、丸瓦は39点(7,810g)、熨斗瓦は1点(670g)、塼は1点(180g)、判別不明が43点(1,760g)であった。

1は須恵器蓋の天井部である。つまみを欠損する。口縁部は3分の1が遺存し、推定口径14.4cmである。天井部外面を回転ヘラケズリしている。2は須恵器壺の底部である。推定底径は6.3cmである。3・4は

須恵器甕である。3は甕の口縁部破片である。推定口径21cmである。外面平行タタキを施している。4は甕の胴部である。外面平行タタキ、内面無文の当て具痕を施す。5～10は土師器皿である。5～8は無高台の皿で、口径は11.7～12cmでほぼ同じ口径である。底部回転糸切りの後、回転ヘラケズリする。5・10は高台付皿である。5は完形、10は底部のみである。いずれも内面に黒色処理を施している。5の口径は13.2cmである。11・12は土製品である。11は筒型の土錘であろう。12は土玉である。

13～19は平瓦である。13は凸面縄タタキ、凹面布目痕、枠板圧痕を持つ。端面は欠損する。14は凸面縄タタキ、凹面糸切り痕後、布目痕である。枠板圧痕を伴う。凹面側縁ヘラケズリである。15は凸面縄タタキ、凹面糸切り布目痕である。凹面側縁ヘラケズリである。16は凸面縄タタキ、凹面布目、枠板圧痕を伴う。凹面側縁ヘラケズリである。17は凸面縄タタキ、凹面布目痕、枠板圧痕である。凹面側縁ヘラケズリである。18は凸面縄タタキ、凹面布目痕、枠板圧痕を持つ。凹面側縁ヘラケズリである。19は凸面縄タタキ、凹面布目痕、枠板圧痕である。凹面側縁ヘラケズリである。

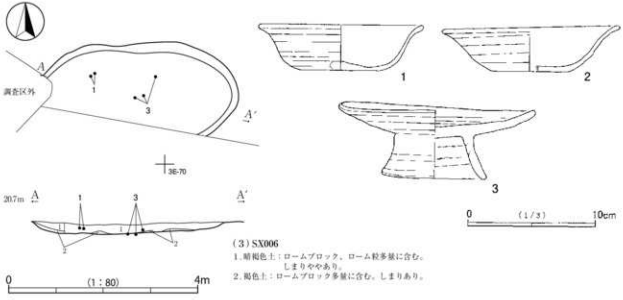
20～26は丸瓦である。20は凸面タテナデ、凹面布目痕である。凹面側縁ヘラケズリである。21は凸面タテナデ、凹面布目痕である。凹面側縁ヘラケズリである。22は凸面タテナデ、凹面布目痕である。凹面側縁ヘラケズリである。23は凸面タテナデ、凹面布目痕である。凹面側縁ヘラケズリである。24は凸面タテナデ、凹面布目痕である。側端面2面切りである。25は有段式丸瓦である。凸面ヨコナデ、凹面布目痕である。凹面側縁ヘラケズリである。26は凸面ナデ、凹面布目痕である。27は塼である。裏面に布目痕、側面ヘラケズリする。28は、熨斗瓦である。凸面縄タタキ、凹面布目痕である。枠板圧痕は確認できない。

溝の時期は、覆土中位からまとまって出土した土器類が、9世紀前半期であることから9世紀半ばまでは機能していたのではないかと推測される。

第6節　その他の遺構

(3) SX006（第47図、図版13・16）

位置・規模　3D-69グリッドを主体に位置している。近・現代の撹乱により遺構南側は削平されている。



第47図　(3) SX006

長軸方向４ｍ以上、短軸方向２ｍ以上、検出面からの深さ16㎝、不定形の浅い掘り込みで平面形態は楕円形を呈する。掘り込み底面からは遺存状態の良い土師器がまとまって出土している、焼土が検出されていないが、あるいは、土器焼成遺構の可能性があるかもしれない。

覆土　覆土は、ロームブロック、ローム粒を多量に含む暗褐色土を主体とする。

遺物出土状況　遺構中央の底面近くから土師器が出土している。

出土遺物　図示できた遺物は、土師器坏３点である。１は推定口径12.6㎝、２は推定口径13.8㎝である。いずれも底部は回転ヘラケズリである。３は足高の高台付皿である。完形で口径は15.0㎝である。

出土遺物から遺構の年代は、９世紀第１四半期～９世紀第３四半期と考えられる。

(2)ＳＫ００１（第48図）

位置・規模　2C-46グリッドに位置する。平面形は不定形を呈する。検出面の規模は長軸方向1.0m、短軸方向0.8mで、検出面からの深さは0.4mである。

覆土　覆土はローム粒を少量含む暗褐色土を主体としている。

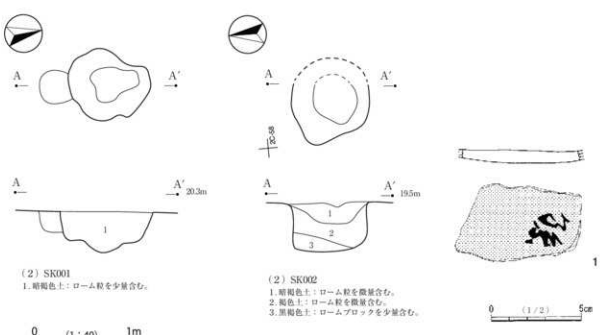
出土遺物　遺物は出土せず、時期を特定することは困難である。同地点では、遺構・遺物は奈良・平安時代を主体とすることから、奈良・平安時代の遺構とした。

(2)ＳＫ００２（第48図、図版16）

位置・規模　2C-59グリッドに位置する。平面形は円形を呈する。検出面の規模は直径0.8mで、検出面からの深さは0.5mである。掘立柱建物跡の一部かもしれない。

覆土　覆土はローム粒を微量に含む褐色～暗褐色土を主体としている。

出土遺物　図示できた出土遺物は土師器１点出土する。１は、土師器盤の底部片で、内外面は赤色塗彩する。外面に「孫？」の墨書が施されている。



第48図　(2)SK001・(2)SK002

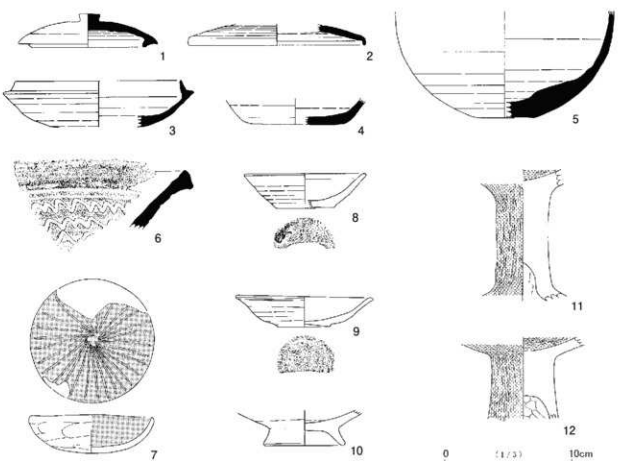
第７節　遺構外出土遺物

１　概要

奈良・平安時代の遺物は、主に近・現代の撹乱層中から出土している。遺物としては、奈良・平安時代の土師器・須恵器で、小破片がほとんどであった。出土量はあまり多くないことから、遺構密度の低さをある程度は反映しているのではないかと考えられる。なお、古墳時代中・後期の遺物が少量出土していることから、本節において合わせて掲載することとしたい。

２　出土遺物（第49図、図版16）

１～６は須恵器、７～12は土師器である。１・２は７～８世紀代の須恵器蓋である。１は推定口径12.0cmの小型品である。２は蓋口縁部破片である。推定口径13.8cmである。３・４は須恵器坏である。３は推定口径13.2cmで、時期は６世紀代であろう。４は坏の底部である。５は須恵器壺の胴部下半である。底部近くはヘラケズリである。６は須恵器甕の口縁部である。頸部に３条の波状文が施されている。７～９は小型の土師器坏である。７は口径9.6cmである。外面手持ちヘラケズリ、内面放射状に暗文を施す。８は口径9.6cm、９は口径10.8cmである。内外面ナデ、底部回転糸切りである。10は高台付坏である。11・12は高坏の脚部で、ともに内外面赤彩されヘラミガキ調整されている。11は棒状の脚部で、５世紀代と考えられる。



第49図　古墳、奈良・平安時代遺構外出土遺物

第６章　総括

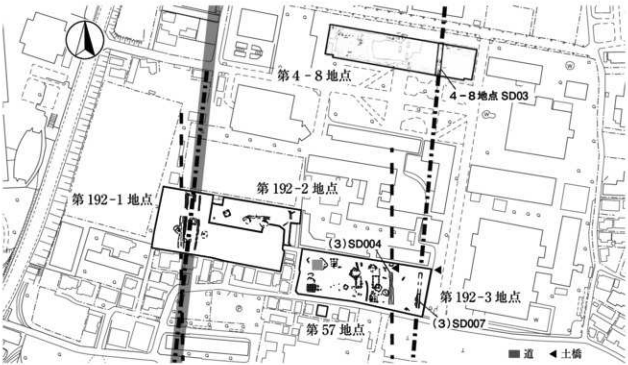
今回報告する国府台遺跡第192-2地点・第192-3地点の発掘調査では、縄文時代から奈良・平安時代までの遺構・遺物を検出した。とりわけ古墳時代後期から奈良・平安時代の遺構については、主軸方位の揃う掘立柱建物群や大溝、版築工法による掘込地業を行った建物跡などを検出しており、下総国府跡に関連するとみられる遺構群として注目される。本章では、これらの時期の遺構群について改めて言及し、総括としたい。

第１節　７世紀以降の遺構群とその変遷

今回の調査地点では、古墳時代後期の竪穴建物跡８棟が検出されている。このうち出土遺物から時期が特定できる竪穴建物跡は、いずれも７世紀中葉～後半であり、８世紀以降になると竪穴建物跡の軒数が極端に減少するようである。国府台遺跡全体の傾向として、竪穴建物跡は、７世紀末～８世紀初めにかけて棟数が増加し、８世紀後半～９世紀中葉にはやや減少するものの、９世紀後葉に再び増加に転じる（加藤2014）。今回の地点では、７世紀末～８世紀初めには竪穴建物跡が見られなくなるようで、近・現代の大規模な造成による撹乱の影響を加味しても、国府台遺跡の北部との違いが現れているのではないかと思われる。

奈良・平安時代の遺構としては掘立柱建物跡、版築遺構や大溝が主に検出された。掘立柱建物跡は、６棟のうち２棟が側柱建物、４棟が総柱建物であり、総柱建物のうち２棟は布掘り建物である。全ての建物で主軸方向が座標北を向き、建物を築造する上での計画性を読み取ることができる。とりわけ、注目されるのが大溝(３)SD004である。今回の調査区の東側に位置するこの溝は、座標北を向いて南北に延びており、検出した掘立柱建物跡は、すべてこの溝より西側に位置している。また、この溝には、土橋と考えられる切れ目があり、その西側には柱痕跡を伴う２基の柱穴列が見つかっており、木戸のような施設を想起させる。(３)SD004の西側約160mの地点に南北に延びる同規模の大溝（１)SD004が検出されており、座標北を向くと見られることから、座標北を示す遺構群の範囲を両者が東西で区画している可能性を示唆している(第49図)。一方、この（３)SD004の東側約20m離れて、座標北からやや東、N-5°-E振れた方向に延びる大溝（３)SD007が検出されている。溝の覆土からは９世紀第１四半期～中葉の土器とともに、瓦塼類が出土している。この溝を検出した第192-3地点から約300m離れた市川市教育委員会による調査地点の第４-８地点では、最大幅４m、最深1.7mの大溝が検出されており（市川市　2005)、この大溝の延線上に（３)SD007が位置しているとみられる。およそN-5°-E振れた（３)SD007の大溝と同様の方位を示す遺構は、今回の調査範囲ではみられないが、第192-1地点で検出された道路跡とされている（１)SF001の方位がほぼ同じ方位を示しており、強い関連性があると考えられる。

もう一つ注目されるのは、版築遺構の（３)SX001である。この地点の南側隣地の市川市教育委員会による第57地点でも版築工法を用いた掘込地業による建物跡が検出されており、この建物跡は先行する掘立柱建物を壊して、版築地業が行われていることがわかっている。これらの版築遺構の規模は、明確にはつかめていないが、ある程度の間隔をおいて掘込地業による建物跡が建てられていた可能性があることを示している。



第50図　国府台遺跡第192地点とその周辺　(S=1/3000)

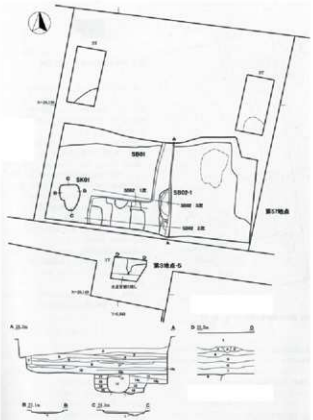
第２節　布掘り掘立柱建物跡と千葉県内の事例

布掘り掘立柱建物跡２棟が、第192-2地点・第192-3地点の２か所から検出されている。通常みられる掘立柱建物跡と異なり、一般の集落内では、あまり見られないものである。ここでは千葉県内における幾つかの検出例を紹介し、今回の検出例と比較検討してみたい。

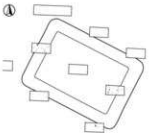
今回検出した２棟は、いずれも主軸方位が座標北を向き、南北に延びる溝状の柱掘方を持つ。覆土中から時期の特定できる遺物は出土しなかったが、(２)SB002は９世紀後葉～10世紀初めの竪穴建物跡と重複しており、(２)SB002が古いと判断されることから、９世紀半ばまでには廃絶した建物であろうと考えられる。

千葉県内での布掘り建物跡の検出例としては、市川市国府台遺跡第８地点(市川市　2008)、市原市村上遺跡(千葉県文化財センター　1996)、君津市外箕輪遺跡(君津郡市文化財センター　2020)、成田市上福田和田谷津遺跡(千葉県文化財センター　2018)、相馬郡の正倉跡とされる我孫子市日秀西遺跡(千葉県文化財センター　1980)などがある。日秀西遺跡の事例を除くと、一遺跡での検出例は少なく、壺掘りの柱掘方の一部を布掘り柱掘方で代用する例がほとんどである。それに対して、日秀西遺跡では布掘り掘立柱建物跡が15棟検出されている。他遺跡と同様に壺掘り柱掘方と併用する物も見られるが、今回検出した(３)SB004に類似する、布掘り柱掘方を平行に配置するタイプの掘立柱建物跡も検出され、このうち建物規模のわかるものでは、３間×３間の建物跡４棟、４間×３間の建物跡１棟、４間×４間の建物跡２棟、10間×３間の建物跡１棟などがみられる。今回検出した布掘り掘立柱建物跡(３)SB004の建物規模も、３間×３間ないしは４間×４間程度の規模であろうと推定される。

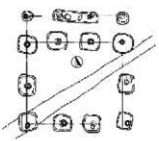
国府台遺跡には、下総国衙や葛飾郡衙に関連する諸施設の存在が想定されてきたことから、今回検出された布掘り掘立柱建物跡などが正倉の一部である可能性があり、その他に座標北に揃う掘立柱建物跡群な



国府台遺跡第57地点SB01



国府台第８地点１号掘立



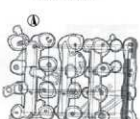
外箕輪SB３

村上遺跡SB１

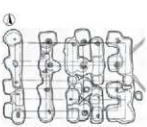
上福田和田谷津SB-01

日秀西８号建物

日秀西９号建物

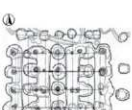


日秀西11号建物



日秀西12号建物

日秀西18号建物



日秀西20号建物

日秀西21号建物

日秀西22号建物

日秀西24号建物

第51図　千葉県内の布掘り掘立柱建物跡

ども関連遺構群としてとらえることができるだろう。版築工法による掘込地業の建物跡など官衙的な性格を持つ遺構も検出されており、今回の調査地点周辺の重要性を示していると考えられる。これら遺構群の性格と位置付けについては、国府台遺跡においてこれまでに実施されてきた調査成果を踏まえ検討を進めていく必要があるだろう。

第３節　版築遺構の類例と掘込地業

版築工法による掘込地業の建物跡（３）SX001が第192-3地点から１棟検出されている。国府台遺跡第57地点からも掘立柱建物の廃絶後に掘込地業の建物が建てられていたことが確認されている（市川市教育委員会　2008）。今回検出された（３）SX001の南側約30mの地点にあることから、このような遺構が周辺に幾つか存在し、遺構群を形成している可能性を示唆している。千葉県内では、我孫子市日秀西遺跡で６棟の掘込地業による建物跡が検出されており（千葉県文化財センター　1980）、その中には、掘立柱建物の廃絶後に建物が建設されている事例があることから、掘立柱建物から掘込地業の建物へと建替えられていく過程が国府台遺跡においても見られることは重要である。

今回検出された（３）SX001の版築土層の状況については、本文でふれているが、改めて写真と転写土層を観察してみると、第37図の土層説明で記しているように、上下で大きくＡ群とＢ群に分けることができる。Ａ群は黒褐色土を主体とする版築層、Ｂ群はロームとハードロームブロックを主体とする版築層である。青木　敬が飛鳥地域の古代寺院の事例から、基壇部分と掘込地業部分の色調や質の違いを指摘していることを参考にすれば、Ａ群の黒褐色土を主体としている層群が基壇部分、Ｂ群は掘込地業部分の版築に相当するのかもしれない（青木　2012）。このことから掘込地業厚は約50cmとなる。また、版築土層の観察では、最も深い底面には立川ロームを使用したローム・ハードロームブロックからなる黄褐色土を敷いていること、その上にはハードロームブロックの混入があまりない暗褐色土を敷いていることが観察され、概ねこの２層が繰り返され版築層が形成されていることがわかる。このことから、版築作業には、色調・土質の異なる土が用意され、丁寧に積み重ねられ、搗き固められていることが理解できる。また、版築土のサンプルを採取していないため土壌分析を行っていないが、転写した版築層を顕微鏡観察すると細粒～中粒の細かい砂が目立つことから、地盤の強度を高めることを意図して版築土に砂が混ぜ込まれていた可能性がある。今後、同類の遺構について土壌分析などを行えば、建物基礎の構築に必要な建築土についても、新たな知見を得ることができるのかもしれない。

参考文献

青木　敬　2012「掘込地業と版築からみた古代土木技術の展開」「文化財論叢」奈良文化財研究所学報第92冊
市川市教育委員会　1996「国府台遺跡第８地点」「平成7年度市川市内遺跡発掘調査報告」
市川市教育委員会　2001「下総国府跡－国府台遺跡緊急確認調査報告書－」
市川市教育委員会　2005「千葉・市川市・国府台遺跡」「文化財発掘出土情報」７月号 ジャパン通信情報センター
市川市教育委員会　2008「平成12～15年度　市川市内遺跡発掘調査報告」
財団法人千葉県文化財センター　1996「市原市村上遺跡・村上山王遺跡・廿五里十三剏遺跡」第309集
加藤貴之　2014「市川市域の遺跡」「下総国戸籍 遺跡編」市川市
財団法人君津市文化財センター　2020「千葉県君津市外箕輪遺跡発掘調査報告書」第98集
財団法人千葉県文化財センター　1980「千葉県我孫子市日秀西遺跡発掘調査報告書」第24集
財団法人千葉県文化財センター　2018「主要地方道成田安食線道路改良事業に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅱ－上福田保町遺跡・上福田13号墳・上福田和田谷津・他－」第229集
千葉県教育委員会　2019「市川市国府台遺跡第192地点」第30集

写　真　図　版

国府台遺跡周辺航空写真（1967年撮影）

図版2

第192-3地点北東部（北から）

第192-3地点南西部（北から）

第192-3地点南東部（北から）

(2) SI001（南から）

(2) SI001遺物出土状況（西から）

(2) SI003（南西から）

(2) SI004（南西から）

(2) SI005（北東から）

(2) SI005カマド（北東から）

(2) SI005（南から）

(2) SI006炉（南西から）

図版4

（3）SI001・SI002（北から）

（3）SI007（北東から）

（3）SI007 カマド（南東から）

（3）SI007 遺物出土状況（南東から）

（3）SI007 遺物出土状況（南西から）

（3）SI009（南東から）

（3）SI009 カマド（南東から）

（3）SI011（北西から）

（3）SI012（北から）

（3）SI013（南西から）

（3）SI014（南東から）

（3）SI014遺物出土状況（南東から）

（3）SI015（北西から）

（3）SI016（北東から）

（3）SI016遺物出土状況（北西から）

（3）SB001（北から）

図版6

（3）SB001-P1 セクション（南から）

（3）SB001-P8 セクション（南東から）

（3）SB002（北から）

（3）SB002-P1 セクション（西から）

（3）SB002-P2 セクション（東から）

（3）SB002-P3 セクション（東から）

（3）SB003（北から）

（3）SB003-P8 セクション（南から）

（3）SB004・（3）SK008・（3）SK009（北から）

（3）SB004 G-G′セクション（北東から）

（3）SK008 セクション（北西から）

（3）SK009 セクション（北東から）

（3）SB004 南壁セクション（北から）

（3）SB004 南壁セクション（北から）

（3）SB004 H–H′セクション（東から）

（3）SB005（北から）

（3）SB005 P1セクション（南から）

（3）SB005 P2セクション（西から）

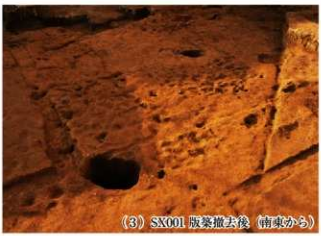
（3）SB005 P4セクション（東から）

（3）SB005 P6セクション（東から）

（3）SA001（北から）

（3）SX002（東から）

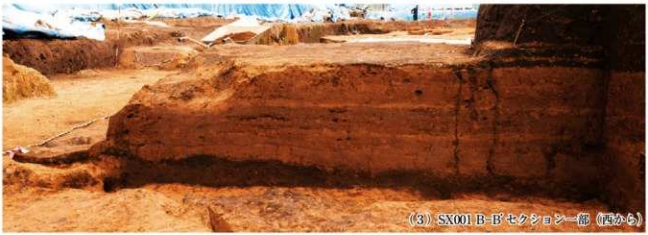
（3）SX001 版築遺構（北東から）



（3）SX001 版築撤去後（南東から）

（3）SX001 B–B′ セクション一部（西から）

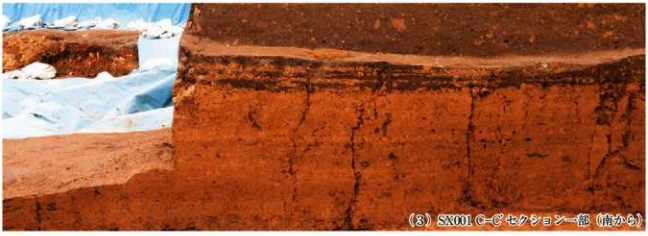
図版10



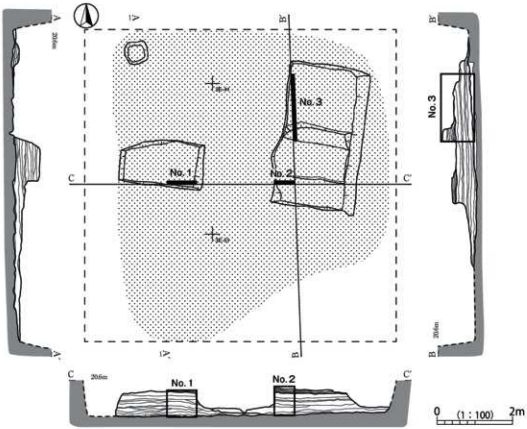
（3）SX001 B–B′セクション一部（西から）

（3）SX001 B–B′セクション一部（西から）

（3）SX001 C–C′セクション一部（南から）



（3）SX001 C–C′セクション一部（南から）



（3）SX001 版築層の転写位置

（3）SX001 版築剥ぎ取り作業（剥離面の整形）

（3）SX001 版築剥ぎ取り作業（溶剤除布）

（3）SX001 版築剥ぎ取り作業（剥離）

（3）SX001 版築剥ぎ取り作業（搬出）

図版12

（3）SD001・（3）SD002北側（北から）

（3）SD005南側（南から）

（3）SD004 B–B′セクション（北から）

（3）SD004（北から）

（3）SD007（北西から）

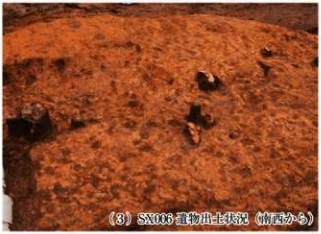
（3）SD007 B–B′セクション（南から）

（3）SD007 北端部（南から）

（2）SB002（南から）

（2）SK03 遺物出土状況（南から）

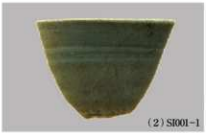
（2）SB002 セクション（北から）


（3）SX006 遺物出土状況（南西から）

（3）SK002（南東から）

（3）SK003（東から）

（3）SK004（西から）


(2)SI001-1

(2)SI003-2

(2)SI003-4

(2)SI003-5

(2)SI005-1

(2)SI005-2

(2)SI005-3

(3)SI007-1

(3)SI007-2

(3)SI007-3

(3)SI007-4

(3)SI007-5

(3)SI007-6

(3)SI007-7

(3)SI007-8

(3)SI007-9

(3)SI007-10

(3)SI007-11

(3)SI007-12

(3)SI007-13

(3)SI007-14

(3)SI007-15

(3)SI007-17

(3)SI007-18

(3)SI007-19

(3)SI007-21

(3)SI007-22

(3)SI007-23

(3)SI009-1

(3)SI009-4

(3)SI009-5

(3)SI009-6

(3)SI009-9

(3)SI011-1

(3)SI011-2

(3)SI014-2

(3)SI014-4

(3)SI014-5

(3)SI016-1

(3)SI016-2

(3)SD004-3

(3)SD004-4

(3)SD004-6

図版16

(3)SD007-1
(3)SD007-5
(3)SD007-6
(3)SD007-7
(3)SD007-8
(3)SD007-9
(3)SD007-10
(3)SX006-1
(3)SX006-2
(3)SX006-3
(2)SK002-1
遺構外-1
遺構外-3
遺構外-5
遺構外-6
遺構外-7
遺構外-8
遺構外-9
遺構外-10
遺構外-11
遺構外-12

(3) SD007 瓦塼類

縄文土器・弥生土器

(3) SI001-1
(3) SI001-2
(3) SI001-3
(3) SI001-4
(3) SI001-5
(3) SI001-6
(3) SI001-7
(3) SI001-8
(3) SI012-1
(3) SI012-2
(3) SI012-3
(3) SI012-4
(3) SI012-5
(3) SI015-1
(3) SI013-1
(3) SI013-2
縄文遺構外-1
弥生遺構外-1
弥生遺構外-2
(3) SI012-6
(3) SI015-2
(3) SI015-3
(3) SI013-3
弥生遺構外-3
弥生遺構外-4
弥生遺構外-5
弥生遺構外-6
弥生遺構外-7
弥生遺構外-8
弥生遺構外-9
弥生遺構外-10
弥生遺構外-11
弥生遺構外-12
弥生遺構外-13
弥生遺構外-14

土製品・石製品

(3) SI007-24
(3) SI007-25
(3) SI009-13
(3) SI014-6
(3) SD004-8
(2) SI003-7
(3) SD007-11
(3) SD007-12
(3) SI007-26
(3) SI007-27
(3) SI007-28
(3) SI007-29
(3) SI007-30

報告書抄録

ふりがな	いちかわしこうのだいいせきだい192-2・3ちてん
書名	市川市国府台遺跡第192-2・3地点
副書名	国府台県営住宅建替事業埋蔵文化財発掘調査報告書2
巻次	2
シリーズ名	千葉県教育委員会埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第52集
編著者名	勝田雄大　蜂屋孝之
編集機関	千葉県教育委員会
所在地	〒260-8662　千葉県千葉市中央区市場町1-1　TEL043-223-4129
発行年月日	西暦2024年2月26日

所収遺跡名	所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
国府台遺跡 第192-2地点 第192-3地点	市川市国府台 一丁目2-5ほか	12203	003 (192)	35度 44分 29秒	139度 54分 20秒	20201116～ 20210115 20210215～ 20210226 20211206～ 20220228 20220407～ 20220513 20220801～ 20230119	5,178㎡	住宅建替工事
				世界測地系				

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
国府台遺跡 第192-2地点 第192-3地点	包蔵地 集落跡	縄文	陥穴　3基	縄文土器	下総国国庁推定地に関連する掘立柱建物跡・版築遺構・大溝などを検出した。
		弥生	竪穴建物跡　6棟	弥生土器	
		古墳	竪穴建物跡　8棟	土師器・須恵器・石製品・土製品・金属製品	
		奈良・平安	竪穴建物跡1棟・掘立柱建物跡6棟・版築遺構1棟・溝状遺構5条・土坑3基	土師器・須恵器・石製品・土製品・瓦・金属製品	

要約

調査地点は、標高22mの台地上にある。弥生時代では後期の竪穴建物跡6棟を検出した。古墳時代では、7世紀代の竪穴建物跡8棟を検出した。奈良・平安時代では、竪穴建物跡1棟・掘立柱建物跡6棟・版築遺構1棟・溝状遺構5条などのほか、土坑3基などを検出した。

注目されるのは、掘立柱建物跡2棟が特殊な布掘りを伴う掘立柱建物跡であったこと、溝状遺構2条が南北に走る大溝であったこと、また、掘込地業による版築遺構が1棟検出されたことで、いずれも官衙関連の施設と推測される。

千葉県教育委員会埋蔵文化財調査報告第52集

市川市国府台遺跡第192-2・3地点

― 国府台県営住宅建替事業埋蔵文化財発掘調査報告書２ ―

令和６年２月26日発行

編集・発行　千葉県教育委員会
千葉市中央区市場町１－１

印　　刷　株式会社　正文社
千葉市中央区都町１－10－６